

留学生急増国における日本へのプッシュ要因とプル要因についての検討  
 —ベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカを中心に—

岡村 郁子（首都大学東京 国際センター）

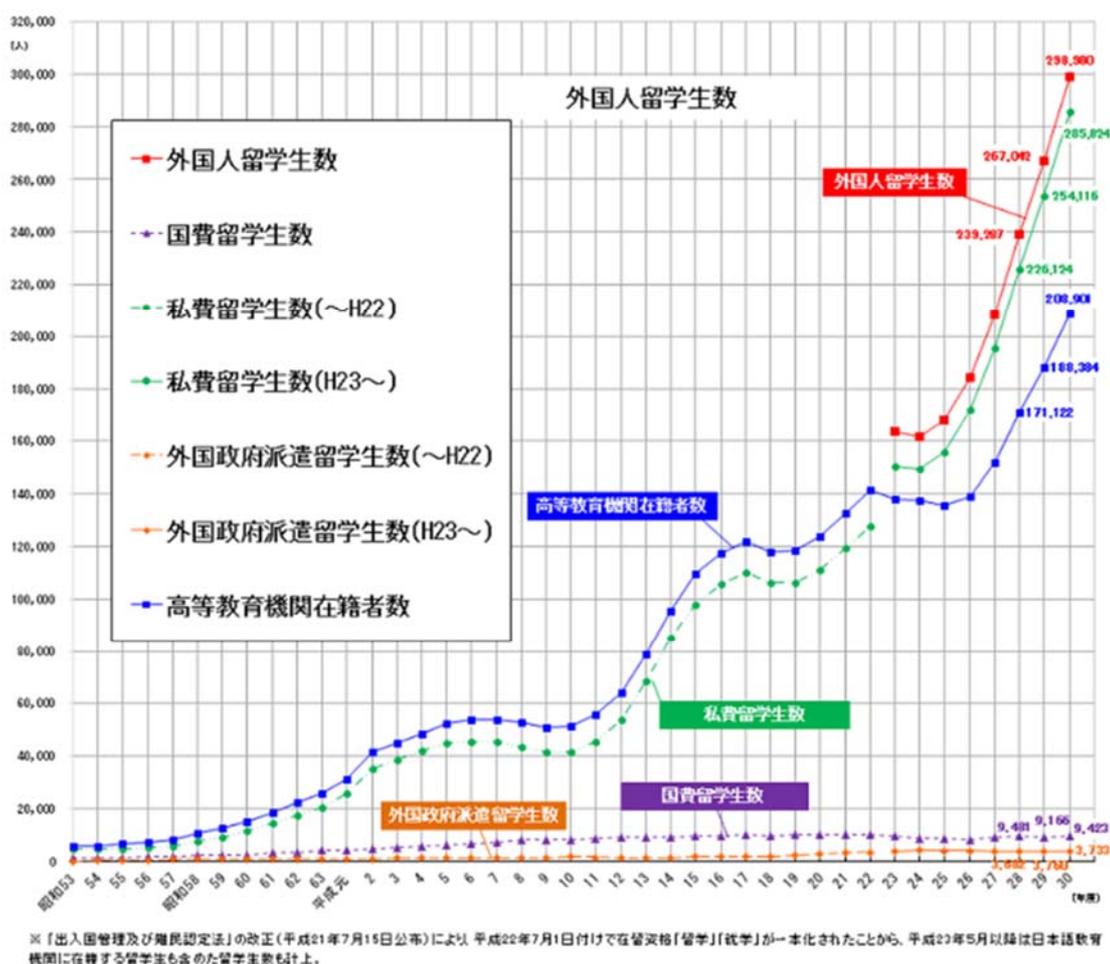
黄 美蘭（ 同 ）

竹田 恒太（ 同 ）

1. はじめに

外国人留学生在籍状況の概要

「日本学生支援機構（JASSO）の平成30年度外国人留学生在籍状況調査」によると、平成30年5月1日現在の留学生総数は298,980人で、平成29年の267,042人に比べて31,938人（12.0%）増であった。【図1】に示すとおり、留学生数は1990年代と2005年あたりに横ばいまたは微減の時期があったものの順調に増加を続け、とりわけ直近5年ほどは連続して前年比10%を超える勢いで増加を続けている。



【図1】留学生数の推移（各年5月1日現在）

（出典：日本学生支援機構（JASSO）平成30年度外国人留学生在籍状況調査）

留学生の出身地域別では、一位がアジアの 279,250 人（構成比 93.4%）で、2 位の欧州 10,115 人（同 3.4%）を大きく引き離している。

【表 1】出身地域別留学生数

地域名	留学生数	構成比
アジア	279,250人	93.4%
	(249,242)	(93.3)
欧州	10,115人	3.4%
	(8,669)	(3.2)
北米	3,415人	1.1%
	(3,182)	(1.2)
アフリカ	2,380人	0.8%
	(2,230)	(0.8)
中南米	1,546人	0.5%
	(1,426)	(0.5)
中東	1,457人	0.5%
	(1,533)	(0.6)
大洋州	809人	0.3%
	(756)	(0.3)
その他 (無国籍)	8人	0.0%
	(4)	(0.0)
計	298,980人	100.0%
	(267,042)	(100.0)

( )内は平成29年5月1日現在の数

(出典：日本学生支援機構 (JASSO) 平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査)

#### 国別の留学生受入れ数の変化

同じく日本学生支援機構 (JASSO) のデータにより、平成 29 年度ならびに 28 年度の国 (地域) 別の留学生受け入れ数および前年度比を示したのが、下の【表 2】である。

【表2】平成28年度・29年度 国別留学生受入れ数の変化

国(地域)名	留学生数		前年度比増減	
	平成29年度	平成28年度	人数(人)	増減率(%)
中国	107,260	98,483	8,777	8.9
ベトナム	61,671	53,807	7,864	14.6
ネパール	21,500	19,471	2,029	10.4
韓国	15,740	15,457	283	1.8
台湾	8,947	8,330	617	7.4
スリランカ	6,607	3,976	2,631	66.2
インドネシア	5,495	4,630	865	18.7
ミャンマー	4,816	3,851	965	25.1
タイ	3,985	3,842	143	3.7
マレーシア	2,945	2,734	211	7.7
その他	28,076	24,706	3,370	13.6
合計	267,042	239,287	27,755	11.6

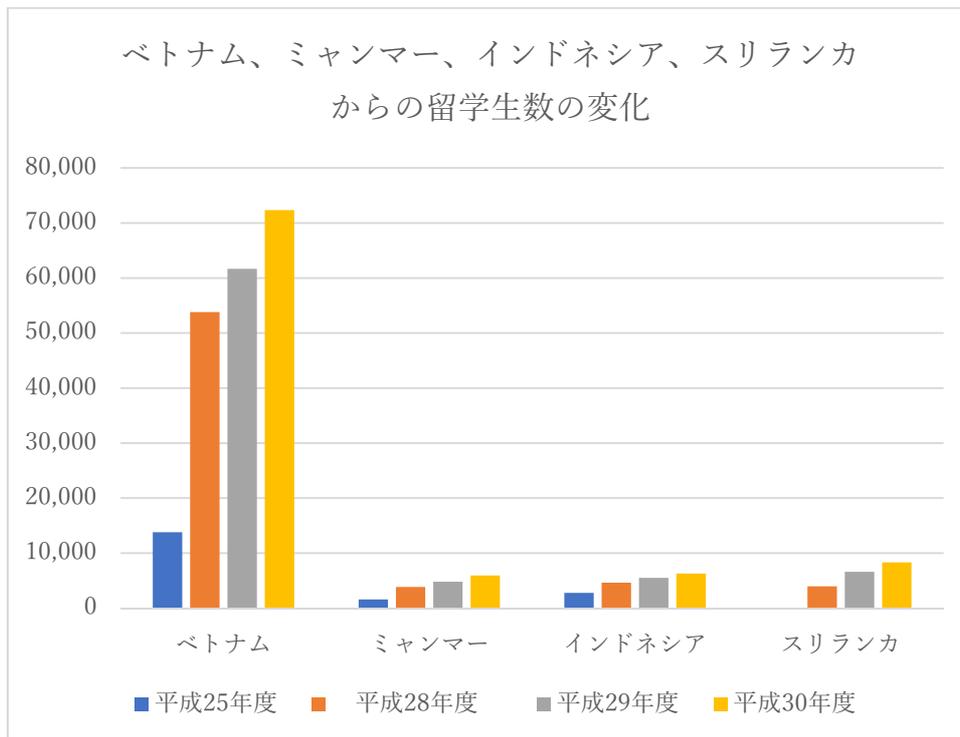
(出典：日本学生支援機構 (JASSO) 平成30年度外国人留学生在籍状況調査)

これによると、ベトナムは中国に次ぐ2位で61,671人(前年比14.6%)、スリランカは6位で6,607人(前年比66.2%増)、続く7位のインドネシアは5,495人(前年比18.7%増)、8位のミャンマーは4,816名(前年比25.1%)で、二桁の増加率が並ぶ。さらに、平成25年度および26年度から30年度の各国別の人数および増加率を、以下の【表3】ならびに【図2】に示した。4か国とも、5年間(スリランカは平成25年度統計外)という短期間で、100%から400%を超える飛躍的な増加率を記録していることがわかる。

【表3】ベトナム・インドネシア・ミャンマー・スリランカからの留学生数の変化

	平成25年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	増加率
ベトナム	13,799名	53,807名	61,671名	72,354名	424.3%
ミャンマー	1,598名	3,851名	4,816名	5,928名	271.0%
インドネシア	2,787名	4,630名	5,495名	6,277名	125.2%
スリランカ	統計外	3,976名	6,607名	8,329名	109.5%

(出典：日本学生支援機構 (JASSO) 平成30年度外国人留学生在籍状況調査より筆者作成)



【図2】ベトナム・インドネシア・ミャンマー・スリランカからの留学生数の変化  
 (出典：日本学生支援機構(JASSO)平成30年度外国人留学生在籍状況調査より筆者作成)

このように、東南アジアおよび南アジア諸国からの留学生はここ数年間で急増している。こうした状況の背景にある要因を探り、正確に把握することは、留学生のさらなる戦略的なリクルーティングばかりでなく、留学後の日本あるいは出身国におけるキャリア形成を考える上でも必要不可欠であり、さらに留学中や留学前後に発生するトラブルを未然に防ぐ上でも重要であると考えられる。

## 2. 先行研究と本研究の課題

この分野の多くの研究では、Push and Pull モデルを用いて留学の動機や要因について分析が行われている。Mazzarol&Souter (2002) は、「プッシュ要因」は留学生の母国における留学を後押しするような経済的・社会的・政治的な要素を含む要因、「プル要因」は留学先の国にある学生を引き付ける要因と定義した。留学をするか否かの決定(ステージ①)には国内のプッシュ要因が、留学先の国の決定(ステージ②)および留学先の機関の決定(ステージ③)には受け入れ国あるいは受け入れ先の教育機関のプル要因が、それぞれ意思決定に影響を与えるとされる。

ただし実際には、ステージ①における意思決定が必ずしも国内のプッシュ要因のみに影響されているということではなく、Wadhwa(2016)の調査では、この決定にプッシュ要因とプル要因の両方から影響を受けるモデルが採用されている。また Swajan Das (2015) ではプ

ッシュとプルの両方の要素をもつ第3の影響要因として「Push-Pull 要因」を想定することによって説明を試みている。

佐藤(2012)はネパールからの日本留学生に関する調査分析の結果、留学生増加のプッシュ要因としては政治的混乱と経済停滞のために国内での雇用機会が少ないこと、高等教育人口の増加が国内の高等教育機関が収容しきれないこと等、プル要因としては学費が比較的安価なこと、アルバイトが可能であること等を挙げた。佐藤はタイやインドネシアについての比較研究も行っているが、ベトナムやスリランカ、ミャンマーなど他の東南アジア・南アジア諸国については、さらなる調査が待たれている。

一方、プル要因については各国について精緻な研究の蓄積は多くなく、とりわけ留学後の就職については早急な調査が必要である。筆者らが本研究に先立って行った、留学生へのパイロットインタビューの結果でも、日本に留学したものの、思ったように日本での就職ができないケースが多く語られており、急増した留学生を日本につなぎとめる方策や、日本との懸け橋となる人材の育成は、今後の大きな課題であるといえよう。李敏(2015)はプッシュとプルは動的なものであり、時代や制度等の変遷とともに変化していくことを指摘しており、これまで研究成果の出ている国も含め、各国ごとに異なる事情に留意して研究を進める必要がある。

本研究では、日本への留学生数が急増している東南アジアおよび南アジア諸国のうち、特に増加率が顕著であるベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカの4カ国について、以下の各点を明らかにすることを目的とする。

- ① 各国から日本へのプッシュ要因とその政治的・経済的・歴史的・社会文化的背景等について
- ② 日本側のプル要因としての社会的背景および留学生受入れ体制、留学生の生活状況（アルバイトを含む）等について

## 2. 研究方法と手続き

### (1) 研究方法

2018年6月から9月にかけて、日本国内および対象国現地でのインタビュー調査および補助的な質問紙調査を実施した。研究代表者および共同研究者の人脈からのスノーボールサンプリングにより各国の留学生および現地在住の大学教員、留学エージェント等のインタビュー協力者を確保し、日本国内ならびにベトナム、ミャンマー、スリランカへ赴き、現地にてインタビューを実施した。

#### 【日本国内調査】

いずれも1~2時間程度、以下の内容で半構造化インタビューを行った。

- ① 留学生対象（ベトナム4名、ミャンマー3名、インドネシア2名、スリランカ3名）：

留学生の出身国において日本留学へのプッシュ要因となったことがらやその背景にあるもの、日本での留学生活、アルバイトの様子、将来希望するキャリア等について

②日本語学校教員対象（1名）：

各国留学生の受入れ状況、在籍する留学生の日本留学の背景、学校での様子や生活状況、卒業後の希望（希望および実績）など

【現地調査】ベトナム、ミャンマー、スリランカにおいて、いずれも1～2時間程度の半構造化インタビューを行った。

①日本留学経験者＝過去に日本へ留学し現在は母国に戻って就職しているもの、もしくは現在留学継続中で一時帰国中の者（ベトナム7名、ミャンマー4名）：

②留学斡旋業者対象（ベトナム1名、スリランカ1名）：日本や他の国々への留学斡旋の状況、日本留学斡旋の理由等について

③元日本留学生を雇用している企業対象インタビュー調査（ミャンマー4名）：日本留学経験者の採用方針、グローバル人材として期待すること、これまでの採用実績等について

【分析方法】

以上のインタビュー結果について音声データを文字化し、日本留学やその関連要因ごとに項目を立てて、各国別に質的に分析した。

各国別の協力者のプロフィール（出身国、年齢、日本滞在の形態）および、渡日動機、渡日前の日本語学習歴、渡日の手段、日本での仕事・アルバイトなど、将来の希望の各項目を、以下の【表4】に示す。なお、この表では、留学生および留学経験者のみについてまとめ、日本語教育関係者、留学斡旋業者、元日本留学生を雇用している企業については掲載していない。

【表4】インタビュー対象者（留学生および留学経験者）の属性および渡日動機など

	場所	年齢	現在の職業・学生の場合ほ学年	日本滞在の形態	渡日動機	渡日前の日本語学習など	渡日の手段	日本での仕事、アルバイトなど	将来の希望	
ベトナム	V1	ハノイ	22歳	大学4年(ベトナム)	都内国立大学交換留学生(2017年~2018年3月)日本語学科(N2取得)	日本の労働者に対する待遇の良さ、家族の経済状況から、貯金の少なからずアジアの国への留学が第一選択	大学で3年間留学先の第一希望はカナダだったが、日本が好きだったので。	大学からの交換留学	呉服店アルバイト	東京のベトナム人材派遣会社に就職が決まっている
	V2	ハノイ	22歳	大学4年(ベトナム)	地方国立大学交換留学生(2017年9月~2018年8月)	日本と日本人が好き、いい仕事を見つけられる。兄が4年間北海道でベトナム人受け入れの仕事をしており、渡日を勧められた。	大学で3年間留学先の第一希望はカナダだったが、日本が好きだったので。	大学からの交換留学	焼肉店アルバイト	日本に戻って大学院へ進学。その後ベトナムで通訳や翻訳者になりたい。
	V3	ハノイ	22歳	ハノイ市内の日本への留学斡旋会社(日本語教育)	大阪のJapan Foundationで2か月研修	日本に2年間日系企業に勤めている友達の影響もあり、日本でもっと勉強するチャンスをもたらされた。	大学で4年間	大学からの短期研修	教育人材開発会社アルバイト	ハノイで現在の日本語教育の仕事を行っている。二人の夢を日本へ送りたい。
	V4	ハノイ	21歳	大学3年生(日本)	地方国立大学学部正規生	ベトナムの大学は最高レベルでも学ぶことが少なく、経営学や農業と生物を学びに日本へ。日本の志望大学にいたベトナム人の先輩から入試についても情報ももらった。	高校3年間日本語を学び、日本文化に興味。アニメ(ちびまるこ、コナン、ドラえもん)貿易大学で日本語ビジネスを専門としたが、将来どんな仕事ができるかわからず、中退してレベルの高い日本の大学への進学を目指した。	ベトナムの大学を中退して日本語試験を受験	英語とベトナム語のチューター(会社員に教える)アルバイト	オーストラリアの大学院進学希望。将来はベトナムに自分の農場を開きたい。
	V5	ハノイ		日本人向けのコールセンター、アウトソーシング会社(ハノイ)	日本語日本文化研究生(国費 日研究生)	元は英語が好きだったが、英語のできる人は多いので、競争が少ない日本語を選択。日系企業の進出が進み、就職のチャンスが増える。	大学で4年間	国費短期留学	—	子育てしつつハノイの日系企業での仕事を続ける。
	V6	東京	23歳	都内私立大学4年生 経営学を勉強	都内私立大学学部正規生	親の勧め、ベトナムの大学を卒業してもいい仕事が見つからないので、日本語を学び、日本の大学へ留学した方が金いっぱい稼げる。できれば就職しずっと日本にいたい方がいっぱいいる。いとこが日本で働いている。	子供の頃から日本のアニメや漫画が好き。高校を卒業して来日	いとこが働いている日本語センターを通して来日	なし	電話販売の会社から内定ももらっている(通訳の仕事)。日本で4~5年働いたら帰国する予定。日本で結婚して家族ができれば日本に残る可能性もある
	V7	東京	20歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	日本のファッションや伝統文化が好き。日本の文化好き(歌舞伎などの伝統文化)観光地にも興味がある。いとこが日本の日本語学校で働いており、サポートを受けた。	高校を卒業して来日。日本に来る前にひらがなとカタカナを少し勉強した。	日本にいるいとこ(日本語教師)からのサポート	なし	日本語学校を卒業したら、日本の専門学校か大学に進学し、ホテル、旅行関係の勉強をしたい
	V8	東京	25歳	都内国立大学大学院修士課程1年生	都内国立大学大学院修士課程正規生	首都圏に先輩がいる、日本の事、奨学金のことについて教えてくれた。首都圏の先生に連絡。ベトナムで試験を受け、合学。アメリカに留学すると、勉強が終わっても働けないので、アメリカにはいかないかった。	大学卒業(2011年8月から2016年4月まで)、バイオメディカルエンジニアリング専門(医療機器開発)日本でも働きたいので、2015年4月から日本語を勉強	指導教官とコンタクトを取り、ベトナムで行われた日本語による入試試験に合格	なし	日本で5年ほど働き、将来はハノイへ帰りたい。
	V9	東京	23歳	建設会社社員	技能実習生	カンボジアやラオスなどでの仕事の経験から他のアジアの国へ興味を持ち、日本が一番いい国と思い、日本に決めた。日本に友人がいた。	大学卒業(ベトナムの建築大学)後、エージェントで6カ月ぐらいうち日本語を勉強	エージェントによる仕事の斡旋。日本の会社の社長がベトナムに来て面接、渡日が決定した。	建設現場の監督(大学3年生の時から、親戚の会社で3年ぐらいうち)	
	V10	東京	31歳	食品工場勤務	技能実習生	生活のため、家族のため。	調理専門学校	日本語のセンターで日本語を勉強。センターから仕事の斡旋を受けた。	アルバイト 化粧品売り場の店員	ベトナムに日本料理店、日本とベトナム料理店や喫茶店を開きたい。
V11	ハノイ	29歳	留学斡旋会社社員	技能実習生	短大で看護学を学んでいたが、親戚の紹介で妹と一緒に技能実習生に応募	日本語教育センター(留学斡旋会社)	親戚に仲介を頼んだ。センターを通過して5,000ドルのところ、3,000ドル程度。	アルバイト	結婚したので、ハノイで現在の仕事を続ける。	
ミャンマー	M1	東京	30歳	大学1年生	大学生	日本で日本語も勉強でき、大学に入って他の専門知識を勉強して、より良い就職をしたい	来日前に、日本語学校で日本語を勉強	日本にいる弁護士(エージェント)に頼んだ	コンビニ、居酒屋	日本で3年くらい働いてから、NGOに入り、ミャンマーと日本を行き来しながら働きたい
	M2	東京	24歳	専門学校生	専門学校生	日本にいるおばさんの勧め、日本に来て、勉強して、自分の生活の質を高める	来日前に、日本語学校で日本語を勉強	ミャンマーにある仲介会社を通して来日	料理店	日本で5年くらい働いてから、ミャンマーに帰り、自分の会社を作りたい。
	M3	東京	29歳	大学1年生	大学生	最初は、韓国に働きに行く予定だったが、韓国にいる方たちから、韓国の話を聞いてあまり良くないと考え、日本を選択	来日前に、日本語学校で日本語を勉強	ミャンマーにある仲介会社を通して来日	料理店	ずっと日本で働きたい。
	M4	ヤンゴン	38歳	地方国立大学博士課程前期	小学生時代2年間(父親の仕事)、学部で日研究生として1年、大学院生として4年間	日本語とミャンマー語の比較語用論で博士号取得のため	(小学校時代日本)ヤンゴンの大学で4年間	父親の仕事に帯同、日研究生(国費留学生)大学院試験受験	(ヤンゴンの)日本大使	博士号を取ってヤンゴンの大学で就職予定
	M5	ヤンゴン	33歳	日本の大学のヤンゴン駐在事務所	都内私立大学学部正規生	姉が日本の大学を卒業してJICAに勤務していた。ミャンマー国内の大学のレベルが低く、設備もよくない。4年が終わってもよい就職ができないので、安全で学費も安い日本へ留学した。	ヤンゴンで大学1年まで勉強してから日本で日本語学校	姉の伝手を頼って	マック、コンビニでアルバイト	ヤンゴンで日本語教育に携わりたい。
	M6	ヤンゴン		日系IT会社社員	IT専門学校 IT関連会社社員	IT技術を活かした就職のため	ヤンゴンのコンピューター大学を卒業後、日本で就職してからプログラミングの習得のために日本語を習い始めた。	ヤンゴンのIT企業から日本へ派遣	IT関連会社(正社員)	日系IT企業で働き続ける。
	M7	ヤンゴン		日系IT会社社員	日本語学校2年間 専門学校2年間	姉がヤンゴンの大学で日本語を学び日本にいたので、よい就職先を求めて留学した。		姉の伝手を頼って	焼肉屋でアルバイト	日系IT企業で働き続ける。
インドネシア	I1	東京	28歳	大学院博士前期課程1年	大学院生	JICAのプログラムを知った時から日本に興味があった。通訳の日本人の話を聞いているうちに、日本の空気や日本の雰囲気が好きになりました。指導教官にメールをだし、Skypeで面接をした。指導教官から奨学金を紹介してもらった。	1年間交換留学として来日した。経験がある。日本で学位を取ることができたので、日本の大学の先生にコンタクトを取った。	日本の大学の先生とコンタクトを取った。試験に合格。来日。日本に帰りたい。	なし	インドネシアに帰り、大学で先生になりたい。または、日本で通訳にしたいが日本語が心配。
	I2	東京	35歳	大学院博士後期課程2年	大学院生	JICAのプログラムを知った時から日本に興味があった。通訳の日本人の話を聞いているうちに、日本の空気や日本の雰囲気が好きになりました。指導教官にメールをだし、Skypeで面接をした。指導教官から奨学金を紹介してもらった。	JAICAの研修プログラムに参加した経験があるが、日本語学習歴はなし	日本の大学の試験に合格。奨学金を申請、受給が決定。来日	なし	日本語の心配があるが、できれば日本で働きたい
スリランカ	S1	東京	24歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	大学で日本語専攻を卒業しており、日本語の運用能力を高めたかった。	高校時代から塾や学校で日本語を勉強していた。大学は日本語を専攻。	エージェントからの紹介、日本から日本語学校の教師が来て面接。エージェントはS1に高校時代日本語を教えた塾の講師	コンビニ	日本語教師、通訳等日本語を活かした仕事をしたい
	S2	東京	28歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	S1と同じ大学で日本語を専攻、大学院進学を目指して来日。	16歳の時にOレベル試験受験のために日本語を選択。当初は試験対策の意味強かった。大学では日本語を専攻した。	大学の教員からは研究生として入ったほうがよいというアドバイスももらったが、自分で手続きを進めるのは難しいと考え、高校の友人にエージェントを紹介してもらった。	コンビニ	インタビュー当時は大学院進学を希望していたが、現在は東京で就職をしている。
	S3	東京	27歳	日本語学校(専門学校)学生	専門学校生	空港で働きたいという夢があり、英語と日本語に力を入れた。姉が既に来日して専門学校に通っており、良い印象があった。	高校で日本語の授業を履修。留学前にエージェントの付属日本語学校で1か月勉強してN5を取得した。	日本留学中の妹からエージェントの紹介を受けた。	アルバイト 焼肉店、コンビニ	空港の地上職

### 3. 国別の調査結果

以下、各国別に、日本留学の背景および対象者別のインタビュー結果について述べる。

#### (1) ベトナム

##### 【日本留学の背景】

##### ベトナムの概況

外務省基礎情報によると、ベトナムの 2017 年度現在の人口は約 9,370 万人、総面積は 331,200 km<sup>2</sup>、主要産業は農林水産業・鉱業・工業、2017 年度 GDP は約 2,235 億米ドル、一人当たり GDP は 2,385 米ドル、経済成長率は年平均 6.81%である（いずれも 2017 年度越統計総局調べ）。

首都はハノイで人口 732 万 8,000 人を擁するが、ホーチミンの人口は 829 万 8,000 人で首都を上回っている（JETRO ベトナム基本情報による。ベトナム統計総局（GSO）調べ）。現在、日越関係は「アジアにおける平和と繁栄のための広範な戦略的パートナーシップ」の下、政治、経済、安全保障、文化・人的交流など幅広い分野で緊密に連携し、2017 年には JNTO 事務所、JASSO 事務所が相次いで開設された。

##### 留学の状況

先の【表 3】に示したとおり、ベトナムから日本への留学生は 2013 年度に 13,799 名であったのが 2018 年度には 72,354 名と、5 年間で 5 倍以上に急増した。ベトナムでは長く正式な日本留学の情報が得にくい状況であったが、2017 年 3 月に JASSO ベトナム事務所が開設され、現在岡田所長ほか 3 名の職員が留学相談の対応や日本留学のプロモーション等に当たり、多くの利用者を得ている。上記 JASSO ベトナム事務所によれば、2018 年度の統計でベトナムからの留学先としてもっとも多いのはアメリカ（19,336 名）、次いでオーストラリア（14,491 名）、日本は 3 位で 10,614 名であった。しかしながら、この数字は学部・大学院・短大の正規生の数であり、ここに「準備教育課程」や「語学教育機関」への留学者数を合わせると、日本（2017 年度で 61,671 名）が第 1 位、2 位がアメリカ（20,834 名）、3 位がオーストラリア（20,834 名）と順位が逆転し、日本への留学者が群を抜いて多い。こちらの数字の 2016 年度 2017 年度からの増加率をみると、アメリカ 5%、オーストラリア 6%であるのに対し、日本は 15%と増加が顕著である。

岡田所長によれば、こうしたベトナムの留学ブームの背景には、高等教育進学者の増加、子どもへの投資、一発勝負の大学入試システム、国内の大学への不信、大卒者の失業率の高さ、学歴・スキルによる賃金格差、先進国へ留学することによる自信・満足などが挙げられている。ベトナム市場への各国からの注目度が高まるにつれて、外国からの投資も増加している。特に日本企業のベトナムへの進出は著しく、2014 年にホーチミン、2015 年にはハノイにイオンモールが出店したこともあり、安くて近い日本への関心はさらに高まっているとのことである

ベトナムでは古くより日本のアニメや漫画の人気が高く、2016年からは初等教育段階で日本語教育が導入されることとなった。日本語能力試験 JLPT 受験者は東南アジアで 1 位であり、日本留学試験 EJU 受験者も増加しており、2018 年はハノイで 109 名、ホーチミンで 248 名と前年の 1.5 倍程度であった。現地には日本企業も多く、日本語を習得すれば就職が有利になることもあり、日本留学はトップクラスの人気を誇る。こうした背景に加え、近年、私立の国際学校の増加、研修旅行や大学の国際プログラム増加、留学生・技能実習生など周辺で外国へ行ったことのある人が多いなど外国へ出ること自体が身近になっているという。

このほか、注目すべきプッシュ要因の一つとしては留学斡旋業者の出現があり、多額の手数料を借金で調達して来日後のアルバイトで返済する者が増加しているが、こうした斡旋業を兼業する大学教員もいる。

### ベトナムの高等教育の状況

ベトナム国内の高等教育への進学率は 2015 年で 59%、2018 年で 73%と急速に増加し、日本の約 80%に近付いている。入試は日本と似た一発入試で、国立が私立より難しい。よい高校に入ればよい大学への道が繋がっているという点も、日本と類似している。

ベトナムの大学を中退して日本に正規留学している V4 によると、教員のレベルがベトナムより日本の方が高いと感じるという。国内の教育への不信感が高く、V4 は、ベトナムでは最高レベルの大学であっても学べることが少なく、1 年で中退して、経営学や農業と生物を学びに日本へ留学することを決意した。また、学生のレベルは比べにくい、日本語学校生の V7 も、日本の学生はよく勉強しているといい、ベトナムの大学生はあまり勉強せずによく遊んでいると述べている。

### ベトナム国内の就職状況

インタビューへの回答のうち、日本留学のプッシュ要因のもっとも大きなものとして、ほとんどの対象者が、国内で条件に見合った就職先が見つからないことや、専門をいかず職種が少ないことを挙げた。日研究生としての留学を終えて、ハノイの日系企業に勤務している V5 は、新卒一括採用ではないベトナムでの就活について、「同じ職種に応募した場合は経験者の方が採用され、新卒が圧倒的に不利である」と述べている。このような理由で、大学を卒業しても職が見つからなかったり、就職しても希望の職を求めて離職したりするケースも多く、大卒者の失業率も高いという。

日本語学校生として渡日していた V7 は、「ベトナムで大学を卒業しても仕事がない、自分の専門とは違う仕事することが多い、例えば、洋服を作る、建物を作るなど・仕事の経験があった方が就職しやすい。」と述べており、ベトナムで大学を卒業しても自分の専門とは違う仕事や、大卒の学歴とマッチしないことも多いことがわかる。また、大学の成績も就職に影響し、成績がよければよい職に就けることもあるが、そうでない場合は難しいという。

## 【調査対象者（1）：留学生および留学経験者】

### 留学の動機

ベトナム人留学生の日本留学の動機としてもっとも多かったのは、ほとんどの対象者の「日本語を身につけていい仕事を見つけない」「お金をいっぱい稼ぎたい」という言説にみられるような、就職を有利にしたいというものであった。交換留学生として日本に留学していたV2は「ベトナム人は日本へは90%はお金持ちになるため、10%が日本のことが好きという気持ちで留学する」と述べているが、ただお金のためというだけではなく、そこには「日本や日本人が好き（V2）」「日本の文化やファッション、アニメが好き（V7）」という、もともと日本への興味関心が高かったこともうかがわれる。日本留学が第一希望であった者もいる一方、家庭の経済状況からお金のかからないアジアの国への留学を考えた者（V1）、カナダなどへ行きたかったが、英語はありきたりなので別の言語を習得した方が有利に働くと考え日本留学を決めた者（V2）など、何らかの制約で日本を選んだケースも多くみられた。費用面との関連では、日本留学のメリットとして、「アルバイトが許可されていること（V2）」を挙げた者も多かった。なお、技能実習生ではさらに顕著に経済的な側面が強調されており、渡日の動機を「生活のため、家族のため（V10）」と述べている。

渡日を決める際に、日本で働いている親族や留学経験のある先輩など身近な人からの勧めや助言に従ったり、日本にいる友人に相談したりした者も多く、対象者11名中7名に上った。

前出のV5は、ベトナムから日本への留学理由として一般的な傾向を述べている。

V5:「一つの理由はアジアの中で、まず日本が一番、発展してる会社。中国だったら結構嫌いとかそういう意見もあるんですけど、韓国に行ってる人もいますけど、韓国人は結構、働きに行く人の場合は殴られてるとか情報がありまして、例えば、テレビの韓国のドラマ見るとケースがあるじゃないですか。逆に、日本人だったら親切とか、そういう情報があります。あと、最近、（ベトナムに進出している）日本の会社が多いので、もし日本語を勉強しに行って、戻ったら日本語を活用できると意見があります。その三つの理由で日本に行っているケースが多くなってくるかなと思います。」

他のアジア諸国と比べて、日本人が親切であるという情報、日本語を活用してベトナムに進出している日本企業で働けるといいう就職へ有利になるという点が人気につながっているようである。また、現在ハノイで日本語教育の仕事についているV3や、交換留学を経て日本での就職を決めたV1によれば、ベトナムの難関大学の入試に落ちた人たちが、リベンジの意味も込めて日本の日本語学校へ留学するケースもあるという。

### 渡日前の日本語学習歴と学習動機

日本留学生の場合、大学あるいは高校時代から日本語を学習しているケースがほとんどである。特に高校から学習を始めた者は、子どものころからの日本文化への高い関心を語っ

ており、日本のドラマやアニメ（ちびまるこちゃん、名探偵コナン、ドラえもんなど）に強く影響を受けて、日本語にも興味を抱いたことがうかがわれる。

ベトナムでは外国語学習としては英語が通常の第一選択であるが、上述した日本留学の動機と同様、兄姉などの親族の勧めで「英語以外の人と違う言語（V2）」として日本語を選択している者が複数みられた。カナダなどの候補の中から日本を交換留学先として選んだV2は日本語を勉強し始めた動機として以下のように述べている。

V2:「実は高校生ぐらいのとき、お兄ちゃんが「日本語勉強したら、もっといい仕事見つけ（られ）るよ」って言われたので、日本語選んで、最初だけは、好きじゃなかったんです。けど私、漢字がめっちゃ大好きで、好きになっちゃいました、日本語。」

また、現地の名門大学で日本語ビジネスを専門としたが、将来への不安や大学のレベルの低さから、中退して日本の大学への進学を目指す者（V4）もあった。国費留学生である日本語日本文化研究生（日研生）として日本へ留学したのちベトナムで就職し家庭を持っているV5は以下のように述べている。

V5:「もともと私は外国語がすごく好きで、まず一つ目の理由は、高校のときは専門は英語だったんですけど、ハノイに住んでいなかったんですね。多分、ハノイに行ったら英語をできる人はいっぱいいますので、多分、勝てないと思っていて、じゃあ、別の言語を勉強しようって思ったんですね。」

一方、技能実習生では状況が異なり、高校や大学を卒業し、少しひらがなとカタカナを勉強した程度で渡日している（V9,V10）。その際、のちに述べる日本留学のための「エージェント」に授業料を支払って、日本語教育や日本のビジネスマナー等の研修を受けてから渡日する人が多いようである。

### 渡日の手段

大学からの交換留学や、日本の大学への正規留学の場合は、大学や指導教員を通しての手続きとなるが、それ以外の場合は、日本で留学あるいは就職している兄姉・いとこなどの親族や友人を頼って渡日するケースや、留学斡旋エージェントを通しての渡日となる。一部の留学や技能実習の場合は、エージェントが留学・就職先を斡旋し日本語教育を施し（V10）、日本の会社の社長をベトナムに呼び、面接をして実習先が決まる（V9）。どのケースでも初期費用は100万円を超えるが、費用の調達方法としては、成績優秀で学費免除になった者の他、親や兄弟からの支援や奨学金を得る者、ベトナムでアルバイトをしてお金を貯めてから渡日する者がみられた。渡日後は大学や友人に紹介されたアルバイトで生活費や学費を捻出している者がほとんどであった。焼肉店のホールやコンビニの掛け持ちなどの話も聞かれた。

今回のインタビューから得た情報に限れば、ハノイの留学エージェントでは6か月の

日本語を勉強するための学費や渡航関連書類手続き費用で3,000万ドン（日本15万円）の初期費用がかかり、渡日後の1年間の学費。住居費、渡航費等をあわせると、日本へ行くには1億6,000万ドンから2億5,000万ドン（80万円～130万円程度）が必要とのことである。V2は、「斡旋してくれた（日本留学）センターに、1年間の学費と3か月の寮費、旅費、センターへの手続き料で125万支払った」と述べており、実際にはもっと費用がかかっているケースも考えられる。技能実習生では、日本での稼ぎを見込んで、50万円の借金をして渡日したケースもあった（V9）。一方で、V3は日本語教育に携わっているが、エージェントに学生を紹介することで一人あたり10万円のキックバックがあることも述べられている。

こうしたエージェントの良し悪しが必ずしも外からはわからない点が現地でも問題となっており、今回のインタビューの中でも、知り合いのケースとして、V2は以下のように語っていた。日本人がいるエージェントであっても、実際には存在しない日本語学校を紹介して雲隠れしたり、十分な日本語教育を施さずに日本へ送るなど、悪質なものがあつ、十分な注意喚起が必要であろう（以下、Iはインタビューアー）。

V2:「取りあえず行く前にお金払わないといけません。それで100万とか150万ぐらいで先に払って、ビザ取れたら行くことができます。」

I:「100万から150万、結構、高いですね。それは・・・。」

V2:「その子は125万ぐらい払ったんです。」

I:「・・・そのビザを取るようなことも、そのセンターがやってくれるんですね。」

V2:「はい。行き先は日本語学校です。」

I:「行く前にそのセンターで日本語の勉強をしていますか。」

V2:「多分3カ月ぐらい勉強してたんですけど、そのとき全く日本語できなかったんですね。今もできないと思います。」

I:「それが、行ったのはいつ頃、行ったんですか。」

V2:「今年の4月です。・・・あと、行ってからずっとバイトしてるんです。」

I:「それはで技能実習生とかじゃなくって、普通に日本語学校に行ってるわけですね。行ってもそんなに日本語学校で勉強してなくって、それでバイトばかりして。だけど、それは125万のお金を払わないといけませんから。」

V2:「払わないといけませんね。それは1年間の学費と、3カ月ぐらいの寮費です。」

I:「そうすると、その3カ月が終わった後の寮費は、また別にかかってくる。」

V2:「だからバイトしないとイケないんです・・・学費と旅費です。その、あとの分は、センターの分です。手続き料みたいなのが、あるんですね。」

I:「そういうセンターの中でも、悪いセンターってあるんでしょうか。」

V2:「悪いセンターがいっぱいあると思います。」

I:「そういうセンターでだまされた人の話とかって聞いたことありますか。」

V2:「はい。お金払っても日本に行けない人はいっぱいいます。

なんか、だまされたんです。それは実際の学校じゃないです。日本の学校じゃなかったの、ビザ取れないし。そのセンターにお金払ってたけど、そのセンターが逃げたんです、どこかに行っちゃう。」

I:「それはお金はもう返ってこない。」

V2:「です。100万ぐらいです。実際は日本語学校がなくてビザ取れない人がいます。自分の後輩なんですけど。」

I:「偽物と本物を区別するっていうか、見ることでできるんですか。なんか方法は。」

V2:「いや、できないと思います。・・・今、その子は韓国にいます。日本は無理だったので、韓国語勉強することになって、もう行きましたですね。1月に・・・」

前出の JASSO ベトナム事務所岡田所長によると、このような悪質な業者はベトナムやネパールにも多く、日本大使館もその対策に乗り出ているという。JASSO からも現地当局に働きかけて、取り締まり強化を依頼しているが、その性質上、なかなか表に出てきていないものも多く、今後さらなる対応が必要であろう。

### 日本に対する印象

渡日後の日本の印象については、

「日本は冷たいといわれていたが、電車の乗り方も教えてくれた (V1)」

「人が明るい優しい。日本人の性格、マナーも好き (V3)」

「日本は便利で安全。ゴミがない (V7)」 「時間をきちんと守る (V5)」

「日本は便利で安全、景色がきれい。日本人は親切な人が多い (V10)」

などの好意的な言説も多くみられる一方で、以下のように述べる者も多数あった。

「日本人は本音とたてまえがある (V2)」

「日本人は会社で働きすぎ。周りの満足のために自分の気持ちをころして、自殺するようなこともある (V3)」

「日本の生活のストレスが大きい」 (V1,V3)

「日本人はまじめ。日本社会はストレスが溜まりやすい (V5,V6)」

「日本企業や学校では先輩後輩関係が厳しく、敬語を使わないといけない (V1)」

「日本にはブラック企業が多い (V2)」

ベトナム人留学生が日本の生活に強いストレスを感じ、息がつまりそうな様子が見られる。

### 日本留学後の就職および将来について

今回のインタビューでは、日本留学を終えてベトナムで働いている人、日本あるいはベトナムで勉強を続けている人、技能実習生として日本で働いている人が対象であった。

以下、類型別にその特徴を述べる。

#### ①将来はベトナムへ帰国して就職する者

今回最も多くみられたのが、日本留学を終えてベトナムへ帰国して働く者であった。多く語られたのは「親のそばに戻りたい」という目的であり、特に女性は一般的には結婚の時期とも重なり、日本で2、3年～4、5年くらい働いて、帰ると述べた人が多い（V1,3,6,7,9）。日系企業の進出により、日本語上級者へのニーズは高い。V2のように通訳や翻訳者を目指す者もいる一方、そういった職種には飽き足らず、日系企業で上を目指す者が多い。「ベトナムに帰ると日本留学経験が活かせ、就職しやすくなる（V7）」、「日本で働いてベトナムに帰ったら、日本語能力と働いた経験が評価されてすぐ上のポジションに就く、日本留学経験がある人の方が昇進しやすい（V8）」という現実があるようである。

日本で貯めたお金と日本語力を利用して、ベトナムに戻って自分の会社や料理店、喫茶店、農場などを作りたいと希望する者もいる（V4,V10）。また、V7は日本語学校卒業後に日本で専門学校へ進み、ホテルや観光について学び、後にベトナムへ帰って働こうと考えている。起業を考えている場合は、日本で専門的な技術を身につけたり、大学院でさらに高度な専門知識を得たりするなど、将来展望をもった日本留学（あるいは就労）であることが特徴である。

日本へ行く前は日本で就職したいと考えていたが、実際に日本に行ってみてあきらめた、という者も複数名みられた。職場が厳しい、残業がある、真面目過ぎるなどの日本の職場環境の話の聞いたりアルバイトで経験するうちに、日本で働くことあきらめたり、V5のように、実際に日本人と働いてみて、以下のような実感を持つ者もある。

V5:「日本人は飲み会のときはすごく盛り上がっているんですけど、次の朝とか結構、冷たい顔で、昨日の話、全くなかったみたいな、結構あって。こっちだったら、多分、一回、一緒に飲みに行ったら友達になったりとか、結構、仲良くなるというか、そういう文化ですけど、日本は違う。」

また、日本でお金を稼げるというのが幻想であること、それがわかっているにもかかわらず日本に向かってしまうという、相反する気持ちがあることも、V1,V2の語りから見えてくる。V1は技能実習生として3年間土木の仕事に就いていた友人の話として、以下のように述べている。

V1:「渡日前は給料がよいと思って豪華な生活ができると思ったが、全然違う。終わった後にちょっとお金が残る程度。」

実際にお金をためようと思って日本へ行っても、期待はずれであることも少なくないようである。この点については、後に紹介する留学斡旋会社からも同様のことが述べられている。

日本における外国人労働者に対する差別についても、以下のような言説がみられた。

V2:「日本に行けばお金が稼げるということと同時に、給料が低く、差別されていることもベトナムの中では有名な話。それを知ってもまだ日本へ行きたい人が多い。」

## ②日本で就職する者

①でみたように、当初日本で就職を希望していても、結局は帰国して就職する留学生も多いが、今回の調査でも、日本で就職を決めた者、希望する者が複数名みられた。V6は、現在携帯電話販売のサービス業の会社から内定をもらっているが、日本で4～5年働いたら帰国する予定であるが、もし日本で結婚して家族ができれば日本に残る可能性もある、と、①と逆の可能性を視野に入れていた。

ベトナムで大学卒業後、いったん医療関係の企業に就職したものの、日本での就職を目指して日本の大学院に進学したV8は、奨学金を得て修士課程（理系）を修了したら帰国せずにそのまま日本で就職を希望している。ベトナムではまだ技術力が低いため、日本で専門性を高めると同時に日本語力を身につけ、日本で5年ほど働いたらベトナムに帰るという将来設計である。このようなケースについては、ハノイで日本語教育に携わるV3も触れており、「大学では留学せず、卒業後に日本へ留学して、いい仕事を見つけるためにさらにスキルアップして箔をつける」という選択肢である。留学していないと就職先のチョイスが少なく、不利になると述べている。またV6によれば、日本から帰国してベトナムで働き始めて、日本と比較した給料の安さからまた日本へ戻る人もいるようである。

今回の対象者の中にはいないが、ベトナム国内の大学で専門的な日本語を身につけて、日本への留学をすることなく、ベトナムに進出している日本企業で働くケースもみられる。日本語ができることで、一般的な仕事に比べて給料が高く、エージェントを通じて就職の機会も多いので、有利に就活を進めることができるという（V2）。

留学を終えていったんベトナムに戻り、エージェントからの紹介を受けて日本で就職することを決めたV1は、「ベトナムと日本の懸け橋になりたい」と願い、父親の反対を押し切って、現段階では日本に永住を希望している。日本に留学していたことが就職活動の上で高いステータスにつながり、ベトナムの会社から多くのオファーがあったが、現在インターンシップ中のIT関連企業に就職が決まり、ベトナムで取締役等の面接を受けて日本へ戻ることになったという。V1は大学からの交換留学生として渡日したが、もともと日本が好きで、渡航後も食文化や交通、住居をはじめ日本の生活へのなじみが早く、大学やアルバイト先の人間関係も良好であった。逆にベトナムへ戻ってからの逆カルチャーショックに悩んでいるという。

ただし、そのようなV1の発言の中でも、日本での就職が決定し、現時点では日本永住を考えているV1は、日本での留学やインターンシップ中の経験において大変だったこととして、以下のように述べている。

V1:「日本で一番大変だったのは、日本語で話しかけること。ストレスがたまって授業をさぼることもありました。・・・最近よくいわれることなんだけど、日本人がすごく外国人を軽蔑するという話です。技能実習生ではなく日系企業の正社員でも、ベトナム人の友達が日本人より仕事がちゃんとできると（社内で）評価されていても、お客さんの会社の日本人に彼が外国人でこの仕事をしていると分かったら、文句を言われます。・・・外国

人の差別とか、会社の評価方法が面倒くさい。例えば同僚との人間関係がいいか良くないかによって、給料が減少します。・・・ベトナムは服装も自由で規則も厳しくない。日本では会社での人間関係が心配です。敬語の使い方なども難しい・・・心配はありますが、自分自身が頑張らないといけないと。」

日本企業に多くの外国人が働くようになって、まだその状況に慣れずに外国人ではなく日本人と仕事をしたいと希望する人がおり、外国人労働者にとって気持ちよく働ける環境を整えるには課題が多いといえる。また、人間関係を重視する評価方法や、服装、敬語など、日本特有の仕事上のルールになじまなければならないと自らを鼓舞する様子も見られ、日本で働くことへのハードルの高さがうかがわれた。

技能実習生として日本に来ている者の中にも、いったん母国へ帰ったのち、再度日本へこうと考えている者もみられた。V10 は以下のように述べている。

V10:「技能実習生の制度は3年だったけど、5年まで伸ばすつもり。5年後ベトナムに帰ったら、日本にもう一回来たい。日本で仕事が終わって、ベトナムに帰ったら自分で喫茶店を開きたいです。ベトナムに、日本の料理のレストランを開きたい。日本には、ベトナムのレストランとか喫茶店を開きたいです。」

ただし、日本で働く場合の日本語力のハードルは高い。それはとりもなおさず、日本人で英語や他の言語で仕事をする人口が極端に少ないことを意味しているが、V6 は以下のように述べている。

V6:「日本に留学しても日本語しゃべれないのは、評価されないんですよ。勉強しないでずっとアルバイト。工場とかでやって。工場は全然、日本語を使わないから。N3以上、持たないと評価はされない。」

母国において日本語を専門で勉強し、日本でも大学で日本語力を伸ばす可能性の高い留学生に比較して、技能実習生の場合、日本語学習に割く時間や、業務上日本語に触れる時間は限られたものであることが多い。V10 のように、技能を身に付けて日本とベトナムの懸け橋になろうとしている技能実習生には、より多くの日本語学習の機会を持ってもらうなど、さらなる配慮が必要であろう。

#### 【調査対象者（2）：留学斡旋業者】

##### 会社の概要

今回、日本への留学あるいは就職を希望する学生たちに日本語教育と日本のビジネスマナー教育を施して日本へ送り出す留学斡旋会社において、日本語教育に携わる方にご協力をいただき、話を聞くことができた。

この会社はハノイに本社、ホーチミンに支店があり、大阪にも日本事務所を設置している。

業務内容は、外国向けエンジニアの育成、技能実習生派遣事業、日本向け留学事業、海外介護人材育成事業、ベトナム国内人材提供業務 日本語・英語教育業務（帰国後の実習生に就職支援）、輸出入・投資 コンサルティング等を業務としている。今回話をお聞きしたのはこのうちの日本語教育を担う「日本語センター」の校長で、ハノイの名門大学の日本語学科の元教授である。なお、上記のインタビュー対象者の話の中に登場した悪質な「センター」とは別物であることを申し添えたい。

現在の生徒数は4クラスで合計120人、毎年増加している。軍事学校のビルの一部を借りた校舎であるが、教室へ続く階段や教室には、日本語の手作りのポスターで「挨拶」のマナーとしてお辞儀の仕方の図解や、「ほう・れん・そう（報告・連絡・相談）」といったビジネスマナーがわかりやすく提示されていた。教室に入ると「こんにちは！」と大きな声をそろえて、礼儀正しいお辞儀で全員が迎えてくれた。

この会社の主な取り組みの一つは、技能実習生の送り出しで、エンジニアや介護士など、年間約100人を日本へ派遣する。東京の人気の高いが、実際には大阪や熊本の日本語学校に送り、進学の場合は専門学校や短大が多いという。近年とりわけ入管が厳しくなっており、最初のうちは全員が渡航を許されていたが、昨年は九州へ送る10名中9名が書類審査で不合格、広島へ送る3名は全員許可がおりたとのことである。このセンターには日本の会社からリクルート担当者が訪れ、その場でマッチングを行って日本へ渡航が決まることもある。

### 渡日した卒業生の様子

このセンターから渡日した人たちの主な業務は、農業、ホテルフロント、ホテルの片付け、ビルメンテナンス、エンジニアリング、介護などである。5～6か月の日本語実習を受けて渡日するが、ベトナムに帰ってからまだ日本語が十分でなく、帰ってきてまたここで勉強する者も多い。介護士の場合はハノイでN4まで勉強し、国内でN3を取得して老人ホームなどに就職する。日本へ行くためのお金は平均5000～6000ドルで、借金をしていくケースが多い。3年～5年間働いて借金を返済するが、1年目は生活費の支給しかなく、2年目から給料が出てその中から税金や保険が引かれて、思うほどに貯金もできないというのが実情とのことであった。

実習生の年齢資格は19歳～35歳であるが、渡航希望者は圧倒的に20代が多いという。高校卒業後、すぐにセンターへ来る人も多いが、この中には大学に不合格となった者も多く、前述した留学生のインタビュー内容に合致する。ただし、若い人たちはきつい仕事で給料が安いことに我慢ができない場合が多く、途中で帰国するケースも少なくないようである。

### 日本留学の人気の背景

まず挙げられたのが、ベトナムと日本の関係の良さである。政府間関係や、国民関係も改善しており、日本への好感度が高い。また、生活や労働の環境がよいこと、国としての評

判が良いこと、近くて航空チケット安い（フライトは500ドル）、旅行ビザの規制が緩和されたことなども挙げられた。また、留学生のインタビュー内容でも述べられたとおり、日本留学からベトナムに帰ってくるといい仕事につけることも人気の理由である。現在、このセンターでは日本語を教える教師が不足しており、日本から帰った実習生を雇って教師にとして雇うことも行われている。

#### 留学斡旋会社の状況について

ベトナムから日本への送り出し機関、留学斡旋会社は、正式な会社だけでも300くらいあるという。この学校の規模は120名程度であるが、平均200～300人程度で、もっと大規模な700人～1000人の学校もある。

政府の許可をとった会社が正式なものであるが、無許可のいわゆる「ブローカー」は、規制があるにもかかわらず多くみられ、悪質なものは後を絶たないということである。担保金5000ドル程度を集めて、実際には日本へ送らないケースや、地方ではもっと安い1000ドル程度をだまし取るような手口もあるとのことであった。

#### **【ベトナム～まとめと考察】**

以上みてきたように、ベトナムでは国内に大卒の専門を活かせる就職先が見つからないことを背景に、日本留学は有利な就職やスキルアップの手段と認識されていることがわかる。前出のJASSOベトナム事務所によれば、ベトナムでは古くより東欧諸国など外国へ出稼ぎに出たり、戦争時の混乱で外国に移住するなど、身近な親や親戚が外国に住んだ経験がある場合が少なくなく、外国へ行くことへの心的なハードルが低いという。実際にインタビューの結果でも、すでに日本に住んでいるきょうだいやいとこ、友人を頼って渡日したり、家族の強い勧めによって日本語学習や日本留学を決めたとするものが多くみられた。国同士の関係も良好なことから日本や日本文化への好感度が高く、地理的にも近く経済的な負担が少ないことから、留学先として選ばれやすいものと考えられる。

また、日本ではアルバイトが許されていること、ベトナムに進出している日本企業が多いことから帰国後の就職にも有利になることなど、経済的なメリットも大きいことがわかる。英語ができる人材に比べて日本語は競争がまだ少なく、希少価値を狙って日本語学習を始めた者も多い。ベトナム国内での大学進学率も上がっているのに対し、大卒に見合うよい職場が見つからない現状があり、自らに「日本語」「日本留学経験」という付加価値をつける戦略として、日本留学が選ばれている。ここに留学斡旋業者が介入してビジネスとして展開されており、今後の外国人材受け入れ拡大の流れに乗って、留学生数もさらに増加するものと考えられる。

しかし、インタビューの中にも繰り返しでてきた、技能実習生の低賃金等の悪条件、外国人への差別、日本企業の働きにくさは、今後の日本のグローバル化を考える上で解決すべき喫緊の課題であるといえる。

## (2) ミャンマー

### 【日本留学の背景】

2014年現在、ミャンマーの総人口は5141万人であり、農業を主な産業としている（外務省，2017）。ミャンマーの学校制度は、小・中・高は6（KG+5）・4・2制で、大学は4～7年（学部により異なる）となっており、小学校のみ義務教育（KGは義務教育ではない）となっている。高等教育機関には、短期大学、大学がある。各学校はすべて政府の統括下であり、教育方針や教育課程などは教育省が管轄している。2016年時点で高等教育機関の就学率は約12%となっている（JETRO，2016）。2017年時点での高等教育機関の在籍学生は約60万人であり、通学型大学に約20万人、遠隔教育大学に約40万人在籍しており、後者が3分の2を占める（上別府，2018）。大学の教育内容は理論に偏りがちで、社会や就職に必要な知識とスキルを得られず、実践的なキャリア教育や指導がないに等しいことから、大学在学中、中退後あるいは卒業後に語学学校、専門学校等で補足する傾向がある。ミャンマーにおいて、知識やスキルを身につけるためには、複数の学校に同時にあるいは継続して通うという、言うならば「教育のカスタマイズ」状態が存在する。この状態は通学型大学も遠隔教育大学に共通している。

ミャンマーの高等教育分野の管轄は歴史的な経緯から複雑である。高等教育機関は全て国立で現在169校あり、教育省、科学技術省、保険省、国防省等による13省管轄体制であったが、2014年の全国教育法制定により、国防省などの管轄の大学を除き、教育省の管轄となった。歴史的に政治運動の中心だったヤンゴン大学とマンダレー大学をはじめとするエリート大学の学部は、学生の非政治化目的で、都市部から遠く離れたところに移転され、これらの大学は大学院のみの大学になったため、どうしても都市部で学びたい学部生は学部が残された大学等に進学することになり、学生と教員は長距離の通学・通勤を強いられ、疲弊し、必然的に教育の質は低下したのである（上別府，2018）。

国際交流基金が行った世界日本語教育機関調査によれば、ミャンマーの日本語学習者は2012～2015年の間で3,000人から11,000人に増加している（国際交流基金，2015）。日本語能力試験の受験者を見ると、2014年の4,434人が2015年には8,000人へと大幅な増加を見せ、特に、初級レベルのN5とN4の受験者が急増している。このような背景には、日本の投資・進出企業の増加があると考えられる。日本企業の進出により、高い日本語能力を持つミャンマー人に対する需要は高く、売り手市場となり、給料が増加している（上別府，2018）。拡大する需要状況を反映し、日本企業への就職の人気は上昇し、日本語力があることは就職に有利に働くため、必然的に日本語熱が高まっている。ミャンマーにおける留学希望者の学習言語は英語が1位であり、日本語はそれに続く（上別府，2018）。

2018年現在、日本の大学や大学院、専門学校などの高等教育機関及び日本語教育機関に在籍しているミャンマー人留学生は5,928名で、全体の2.0%を占め、前年に比べて18.8%増えている（日本学生支援機構，2019）。そのうち、日本語教育機関に在籍している留学生は2543人で、全体の2.8%を占め、前年に比べて16.2%増加している（日本学生支援機構，

2019)。このように、日本に留学するミャンマー人はここ数年、増加傾向にある。

その背景には、どのようなものがあるのだろうか。以下では、日本で留学しているミャンマー人留学生、および日本への留学経験があり、現在ミャンマーで働いている元留学生を対象に行ったインタビュー調査データから、それぞれの特徴について述べる。

#### 【調査対象者（1）：留学生】

日本で大学や専門学校などの高等教育機関に在籍しているミャンマー人留学生 3 名（男性 1 名、女性 2 名）に半構造化インタビューを行った。年齢は 30 代が 1 名、20 代が 2 名で、インタビュー当時、それぞれ大学学部 1 年と専門学校 1 年に在籍していた。また、3 名とも私費留学生であった。以下では、インタビュー項目別に語りについてまとめて述べる。

#### 日本に対する印象

日本は便利で働きやすく給料が良いが、時間に厳しいと語っている。また、日本人は優しく、日本はきれいな国だと述べている。このように、日本については、おおむね肯定的印象を持っている様子がうかがえた。

対象者は日本の印象について次のように語っている。

M1：「日本はいろいろ便利、日本は時間に厳しい。・・・恐らく日本は働きやすく給料が高いと思います。」

M2：「日本人はみんな笑顔です。笑顔を出しています。・・・日本の経済は世界で 3 番目に高い国です。Facebook を見ると、日本にはいろいろと遊ぶ場所がたくさんあります。サクラも人気です。」

M3：「日本人は優しい、きれいな国だと見えます。例えば、ごみとか、とてもきれいです。あと、生活、時間を守るとか、何でも。例えば、電車に乗るときも、みんなちゃんと並んで。それを見て、ミャンマー人が日本に来たい。」

#### 来日動機

ミャンマーで働いた経験があるが、給料が低く、長く続けても将来が心配であるため、来日することを決めたと述べている。日本では日本語も勉強し、大学に入って専門分野の勉強をすることで、将来はより良い就職先を見つけたいと語っている。また、ミャンマーでは就職が厳しいので、日本で日本語やその他の知識を勉強して、より良い仕事に就きたいということである。

対象者は来日動機について次のように語っている。

M1：「日本はいろいろ便利、ミャンマーで幼稚園の先生をしていたが、給料も低いし、長くやり続けても将来が心配です。日本で日本語も勉強するし、大学に入って他の専門も勉強することによって、より良い所に就職をしたいです。」

M2：「おばさんが勧めてくれました。ミャンマーでは何も仕事がないので、日本に来て自

分の生活を高くして、いろいろと勉強をするように言われました。ミャンマーでは就職が難しいから日本に留学する人が多いです。」

M3:「・・・最初は、日本に来る前にマレーシアへ3年間働いて、それで、韓国へ行くと考えたけど、友達たちは韓国で今、働いているので、友達から韓国のことをちょっと聞いたけど、韓国人は全員じゃなくてほとんどの人、態度？ 例えば、ちょっと優しくない感じ。それ聞いて、韓国へ行く予定をやめて、日本に来るかなと思って。そのときも、日本、紹介してくれる人もたくさんミャンマーに会社もいるし、日本に行く決めて、日本語を勉強しています。」

#### どのように日本に留学したのか

仲介会社を通して、日本語学校に入学する形で来日する。その後、日本の大学や専門学校などの高等教育機関に進学し、勉学を続けている。

対象者は次のように語っている。

M1:「(日本に) 来る前は、日本にいる弁護士の先生が全てを紹介してくれたので、あまり探しませんでした。」

M2:「今はミャンマーでも、日本に来るための紹介会社がたくさんあります。・・・その会社を通して日本に来ました。」

M3:「(学校では) 日本語だけです。あと、日本にある学校も紹介して。でも、その学校、〇〇万円ぐらいあるので、(費用が高いから) 私が他の会社(日本語学校を紹介してくれる会社)に変えました。」

#### ミャンマーの就職状況

ミャンマーでは、大学を卒業しても良い仕事には見つからないと語っている。また、ミャンマーで大学を卒業しても、大学で学んだ専門分野の知識とは異なるコンピューターなど仕事に役に立つその他のスキルを身につけないと就職が厳しいと述べている。

対象者はミャンマーの就職状況について次のように語っている。

M1:「ミャンマーでは大学を卒業してもすぐには就職できない。ミャンマーではあまり仕事がないと思います。だから、皆は給料の高い日本に行く・・・」

M2:「大学で勉強することはレベルが下です。大学が終わった後に、また勉強しなければ就職できません。コンピューターなどは全て大学ではなくて、外で勉強します。自分が好きな仕事のことを勉強します。大学が終わった後も2、3年はまた勉強して、その後に就職します。」

M3:「(日本に来る人は) 前よりは多いです。ミャンマーは、大学が終わって仕事しても、自分のためだけ？ 生活もできなかったです。日本では、仕事しては、自分の生活だけではなく、家族のためにも生活はできます。例えば、日本で仕事して、貯金して、また

家に送っても、家の、例えば両親とかも生活もできます。そのお金で。ミャンマーは駄目です。・・・ミャンマーはちょっと、話は。例えば、日本は仕事しては、もうハンサムじゃなくても日本語をよくしゃべれる人、仕事、一生懸命できる人は、大丈夫です。でも、ミャンマーは、他の会社は、背も高いし、ハンサムだし、あと大学卒業も欲しいと、いろいろな書類はたくさんいるので、他の人は卒業しても、背もちょっと低い人もいる、それは駄目になっちゃう。・・・大学終わって、自分の仕事はそんなに簡単ではないです。他の会社において、給料は安い、でもしょうがない。・・・自分の生活もぎりぎりになって、家族じゃなくて、自分のため？ 自分の生活だけでもちょっと大変。・・・」

### 留学後のキャリア

日本で学業を終えたら、日本で就職しようと考えている。ミャンマーでは大学生の就職難が続いており、なかなか良い会社には入れない。そのため、日本の会社で経験を積んでからミャンマーに帰り、自分の会社を設立したり、日本と関連のあるNGOなどの財団に入って、日本とミャンマーを行き来する仕事をしたいと述べている。また、来日前は留学生が終わったら日本でしばらく働いてからミャンマーに帰るつもりだったが、来日してから日本で生活をしているうちに、日本は安全できれいな国なので、ずっと日本で仕事をしたいと考えが変わったと述べている対象者もいる。

対象者は次のように語っている。

M1:「日本語学校で勉強する中で、将来で何をしたいかについていろいろと考えました。

恐らく、私の国にも困っている人がいるので、NGOというボランティア団体に入って、できるだけ助けたいと思いました。将来、日本で働きたいです。3年ぐらい働いてから、自分の国で、日本のNGOとミャンマーのNGOをつなげる仕事をしたいです。」

M2:「日本で大学が終わるまで勉強をして、日本で就職をしたいと考えています。私は日本で5年ぐらい働いて、ミャンマーに帰って自分の会社を作って、自分のしたいことをします。日本で働くのは経験がほしいから。日本人の文化や話し方や、サービスを勉強するためです。」

M3:「大学が終わったら、また日本で就職したいと思います。今、働いているお店も就職ビザを出すと、私に言いました。・・・日本に来る前？日本で5年間ぐらいだけ働いて、またミャンマー帰って自分の仕事をする予定があります。また、日本に来て、2年間ぐらいになったら、日本で続けて仕事したい気持ちが。」

このように、ミャンマー人留学生は、国内の就職難や賃金の低さにより、大学を卒業しても良い就職先が見つからないため、また、日本に対して肯定的な印象を持っているため、日本に留学する傾向が強いことが分かった。特に、ミャンマーでは、通学型大学や遠隔教育大学の卒業生に対する社会的評価が低く、ミャンマーにおいては大学で身につけた専門知識だけでは就職が厳しく、良い会社に入るためには卒業後も知識やスキルを身につけるため

に、様々な学校に通わないといけない現状がある。インタビュー調査から、ミャンマーの学生が日本に留学し、日本語や専門知識を身につけ、良い会社に就職したいと強く希望する様子が示された。また、日本で学業を終えてからは、しばらく日本で働いてからミャンマーに帰り起業をしたり、日本とミャンマーを行き来しながら日本と関連のある職務に就きたいと考えている様子がうかがえた。さらに、来日前には、学業を終えしばらく日本で働いたらミャンマーに帰るつもりであったが、日本で生活をするうちに、ずっと日本に残ることを考えている様子もうかがえた。

#### 【調査対象者（2）：日本へ留学し、現在ミャンマーで就職している元留学生】

日本での留学を経て、現在、ミャンマーで日本と事業関連のある会社に勤めている元留学生3名に半構造化インタビューを行った。以下では、インタビュー項目別に語りについてまとめて述べる。

#### 日本に対する印象

日本は安全で、日本のアニメは人気がある。また、日本人は時間に厳格であり、責任感が強いと語っている。一方で、日本で働くのはストレスが大きいことについても言及している。

#### 来日動機

前述の留学生と同様に、ミャンマーの就職難や日本への憧れを挙げている。ミャンマー国内の就職難については、ミャンマーの大学のレベルはまだ低く、4年制大学の学部を卒業しても良い仕事には就けないと語っている。

#### どのように日本に留学したのか

M7は仲介会社や日本にいる親戚に頼って、来日の手続きを行っている。来日費用は親が捻出することが多いと述べている。M6はヤンゴンで大学を卒業後に日本へ働きに行っており、ヤンゴンに日系企業が進出する際に日本側で採用され、現在はヤンゴン事務所で働いている。

#### 留学後のキャリア

M7は国にいる親の健康問題や周りの友人から日本で働くのは、ストレスが大きいと言われたので、ミャンマーに帰って就職したという。

M7：「(日本で働く)と 残業も多くストレスも大きいのに、日本語もビルマ語も英語もできるけど、そんなにすごく他の人より高いお給料ではない。ミャンマーに帰った方がよい就職ができる。」

このように、日本に対する印象や日本への留学動機及び留学手段などは、留学生と元留学

生でほとんど変わらなかった。一方、家族の都合や日本の職場環境に不安を抱く場合は、ミャンマーに帰り日本と事業関連のある会社に就職する傾向が示された。

また、日本での IT 関連会社での勤務を経て、会社がミャンマーに進出するのを機に、日本採用としてヤンゴン事務所に転勤した M6 は、ミャンマーでの就職の傾向について以下のように述べている。父親は公務員であるが、これからの時代は語学を身に着けて外国企業に就職する方が有利であるという。

M6:「(公務員は)生活が安定して、私たちの時代には・・・公務員になっている人もいますが、何かのきっかけで公務員になったとか、公務員になりたいから頑張ってた人もいますけど。・・・会社のほうがお給料はいいので。・・・外国の会社のほうがお給料高いので。・・・英語とか、日本語も一生懸命勉強して。」

### 【調査対象者 (3) : 元日本留学生を雇用している現地日系企業等】

今回の現地調査において、元日本留学生を雇用している現地日系企業および団体の担当者より話を聞くことができた。企業のプライバシーに抵触するため詳細には述べないが、共通してみられた事柄について紹介する。

#### ミャンマーの国民性について

いずれの雇用先でも、穏やかで勤勉なミャンマーの人々と日本人の気質がよく似ていることが話に上がっている。ミャンマーは 1948 年に英国の植民地から民主主義国として独立したが、1962 年にはクーデターで軍が実権を握る社会主義政権が成立し、1988 年の崩壊まで続くが、混乱の中、以降も国軍が政権を掌握した。2011 年にテイン・セイン政権が発足、長い軍政から民主移管が行われ、さらに 2016 年にはアウンサンスーチー氏が党首を務める国民民主連盟 (NLD) による新政権が発足した。このような政治の激変にも、多くのミャンマー国民は粛々と対応し、大きな騒ぎにならないというのが、日本からミャンマーに駐在している企業人から共通してきかれる印象である。

また、上記【調査対象者 (3)】に登場した M6 は、現在日系企業のヤンゴン事務所においてマネージャー的な立場にあるが、日本人と働く中で気がついた日本人とミャンマー人の違いについて、以下のように述べた。彼女は、日本人とともに働くうえで必要なことは、トレーニングをきちんと受けなければならないようにできると考えている。

M6:「まずは時間ですね。ミャンマーの場合って、そんなに時間守らないではないですけど、そんなに厳しくないですね。ミャンマー人は大体アバウトでいける。・・・あとは責任を取ることですね。どうしても最初やっている会社、お客さんに直接やらないといけないし、何かミスがある場合、必ずちゃんと自分がミスしたら責任取って謝って、解決できるまでやるとかは、ミャンマー人はその話ちょっと薄いなと思います。それを最初に分かれば、もっとスムーズじゃないかなって思ったのがありますね。」

I:「日本人と働いて、そういう時間のことですか、そういう意識は高くなってくるんで

すか。」

M6:「そうですね。やりながら。」

I:「でも、それにどうしても慣れない人っていうのも、いることはいるんですかね。」

M6:「そうですね。最初はこれどうしようってプレッシャーもあるんですけど、でも、やりながら。・・・ミャンマーの場合は日本と違って教育もまだレベル低いのではないですけど、実際にこんなことやりましょう、ここに気を付けましょうってちゃんと教えるのがないですね。なので、学校プラス親が教えているじゃないですか。なので、頭悪いから、性格悪いからじゃなくて、大体平均の人がちゃんと教えればできるとは思う、私は。分からないからやってないだけで。」

### 日本語人材の雇用について

ミャンマー人で、日本語で仕事ができる人材の少なさについては、雇用者側から以下のような声がきかれた。

「仕事も分かって、日本語も分かる人材は、もう取り合い合戦ですね。IT の感覚がある人があまりにも少な過ぎるので。・・・マネジメントもできる人って本当に少ない。(日系IT 企業)」

この会社において、少し前までは日本採用の方が給与が圧倒的に高かったが、今ではミャンマーでの給与水準が上がり、特に日本語で仕事ができる IT や会計、エンジニアなどの経験者は、日本採用と現地採用でさほど給与の差がないという。それほど人材不足であり、高給を支払っても雇いたいという状況がうかがわれる。

高度人材と企業のマッチングを行う人材紹介会社のニーズも高まっており、日本資本の日本留学・就職斡旋、人材派遣を行う会社により仲介が行われている。ある会社では2年間で80万円を取り、日本に派遣してIT教育などを行い、ミャンマーの日系企業への就職を斡旋しているという。現在のミャンマーの平均所得は職種によって幅があるものの、月収8,000円程度から、外資系企業で5万円程度といわれており、1年間40万円は多大な金額である。主に支払いは親がしているということで、先行投資としてこれだけの資金をかけても、日本でビジネススキルを身に付けてミャンマーへ帰って就職すれば採算がとれるという状況がある。

### (3) インドネシア

#### 【背景】

2015年現在、インドネシアの総人口は約2.55億人であり、製造業(20.2%)、農林水産業(13.1%)、商業・ホテル・飲食業(13.0%)を主な産業としている(外務省, 2019)。インドネシア教育制度は日本と同じ6・3・3・4制を採っており、小学校・中学校の9年間は義務教育である。小・中学校には、教育文化省が管轄する一般の学校スコラ(Sekolah)と宗教省が管轄するイスラム系のマドラサ(Madrasah)がある。高等教育機関も、管轄が教育

文化省と宗教省に分かれており、計 3,532 校（2009 年現在）があり、そのうち、96%が私立である。また、2010 年時点での高等教育機関の就学率は約 13.8%（JETRO, 2012）で、日本の約 50%と比較すると低い。

インドネシアでは長年、博士号を有する教育の少なさが高等教育の質向上のための課題と指摘されてきた。高等教育総局はこの課題に対応するため 2008 年以降、教育文化省の予算により、現役大学教員が海外で博士号を取得するためのサンドイッチ・プログラム奨学金を支給している（清水, 2012）。同プログラムは、国内の博士課程に在籍しながら海外の協定大学に一定期間留学し、学位を取得するものである。高等教育総局は、2008 年～2010 年の 3 年間にこのプログラムなどで 4239 人を海外の大学に派遣した。留学生の大多数は理工系を専攻している。

2018 年現在、日本の大学や大学院、専門学校などの高等教育機関及び日本語教育機関に在籍しているインドネシア人留学生は 6227 人で、全体の 2.1%を占め、前年に比べて 12.5%増えている（日本学生支援機構, 2019）。そのうち、日本語教育機関に在籍している留学生は 1558 人で、全体の 1.7%を占め、前年に比べて 19.1%増加している（日本学生支援機構, 2019）。このように、日本に留学するインドネシア人はここ数年、増加傾向にある。

その背景には、インドネシア国内における就職難や将来への不安、日本への憧れなどが挙げられる。以下では、インドネシアの留学生を対象に行ったインタビューデータから、それぞれの特徴について述べる。

#### 【調査対象者：留学生】

日本で大学院に在籍しているインドネシア人留学生 2 人（男性 1 名、女性 1 名）に半構造化インタビューを行った。年齢は 28 歳と 35 歳で、インタビュー当時、それぞれ大学院博士前期課程 1 年と博士後期課程 2 年に在籍していた。以下では、インタビュー項目別に語りについてまとめて述べる。

#### 日本に対する印象：

日本についての印象は好意的であり、日本は安全で、科学技術が進んでおり、インドネシアに近い。また、日本人は親切で、日本は平和的な国であると認識している。

対象者は日本の印象について次のように語っている。

I1：「日本は安全ですし、好きです。・・・ここは（日本は）人が親切です。日本人はあまりストレートに話しません。インドネシアの人と同じです・・・」

I2：「日本は平和です。日本はモダンな国のようでも、モダンと伝統も同じで、良いミックスがあります。」

#### 来日動機：

2 人とも先輩からプログラムの奨学金を紹介してもらっている。奨学金があるため、日本

留学を決めており、奨学金がなかったら、日本に留学することはなかったと述べている。

対象者は来日動機について次のように語っている。

I1:「交換学生ときは、インドネシア人の先輩が、ここで勉強していました。そして奨学金のインフォメーションを、私に教えてくれました。・・・それから先生を調べて、コンタクトして、履歴書やリサーチフィールド等を送って、先生の担当を見て、興味があったので、アクセプトしました。」

I2:「日本に行きたかったのですが、先生を調べて、今、私の先生である〇〇先生を見つけて、先生がメールをくれました。・・・プライベートですが、私の場合は無理だと思いました。他のいろいろな奨学金を探しました。その間は奨学金を探していました。・・・(もし奨学金がなかったら) 難しいと思います。本当に行きたいのですが、奨学金をもらえなければ、難しいことだと思います。」

#### どのように日本に留学したのか:

2人とも日本の大学の教員とコンタクトを取り、指導教官の受入れの承諾を得て、奨学金を申請したと語っている。奨学金がもらえる保証があったから、来日することが可能であったと述べている。

#### インドネシアの就職状況:

インドネシアで大学を卒業してもあまり良い就職先はない。大学の学位以外に、様々なスキルを身につけている。会社に就職しても、収入はあまり多くない。また、会社や国家機関に就職したとしても、将来につながる成長がないと認識している。

対象者はインドネシアの就職状況について次のように語っている。

I1:「会社に入るために試験がたくさんあります。試験で失敗する人もいます。・・・普通の会社はサラリーがそれほど高くありません。・・・大学先生はサラリーだけでなく、プロジェクトがたくさんあります。すごい生活費が後でもらいます・・・」

I2:「インドネシアの会社の環境があまり良くないのです。私が成長するためには、会社の環境があまり良くないのです。途上国は研究が優先ではありません。・・・私の会社は研究の機関ですが、会社の研究の施策について、私には別の意見があります。会社での成長が難しいのです・・・」

#### 留学後のキャリア:

日本での就職経験がほしいが、日本語の漢字が覚えられなく、日本語に自信がないため、日本での就職が心配であると述べている。そのため、日本で学業を終えたら、インドネシアに帰り、大学で先生になりたいと述べている。対象者は、次のように語っている。

I1:「日本で大学や大学院を卒業したら日本で働きたい気持ちがみんなあるが、日本語があまりできないので、帰る人も多い・・・」

一方で、日本語の心配はあるが、インドネシアでも日本でも就職が厳しいので、日本で就職を試みようと思っている人もいます。特に、インドネシアで働いた経験があるが、その職場の環境があまり良くなく、将来のためにならないと感じている場合は、日本で就職しようとする傾向が見られた。対象者は、次のように語っている。

I2：「研究の仕事ですが、インドネシアで研究の仕事があるのは、国立の機関だけです。私立研究機関がないのです。日本は私立研究機関がたくさんあるかもしれません。だから、チャンスがあります・・・」

このように、インドネシアからの大学院生のインタビュー結果から、日本に対する印象が良好であること、奨学金をもらえるチャンスがあったからこそ日本に留学することを決めたことが分かった。つまり、インドネシア人留学生にとって、日本に留学する際の障壁として、留学費用の高さが挙げられる。また、将来のキャリアについては、日本語がまだ不十分なため、日本での就職をあきらめている傾向が見られた。一方、日本語面の心配はあるが、インドネシアで職務経験があり、職場の環境が将来の自己成長にあまり役に立たないと感じている場合、インドネシアにおいても日本においても就職難はあるが、日本で就職してみようとする様子が窺えた。インドネシアの留学生が日本で学業を終え、日本で就職する際の障壁として、言語の問題が挙げられると考えられる。受入側としては、今後、いかにこれらの障壁を取り除き、インドネシア人の留学生を獲得するかが課題になるであろう。

#### (4) スリランカ

##### 【日本留学の近年の状況】

以下では JASSO が毎年公表をしている外国人留学生在籍状況調査結果の中で、日本語学校の在籍数を含む 2010 から 2018 年のものを分析し、その傾向をまとめる。

日本語学校の学生を含むスリランカ人留学生全体で見た場合、2010 年には 930 人だった学生数が 9 倍に近い 2018 年には 8,329 人まで増加している。日本語学校の在籍者数のみに限定すると 2010 年の 153 人から 25 倍を超える 3,900 人にまで増加している。同じ期間の大学、短大、専修学校の在籍者数の伸びが 777 人から 6 倍弱の 4,429 人であることを考えると近年のスリランカ人学生の増加は日本語学校への留学生の爆発的な増加にけん引されていると見てよいだろう。日本語学校の学生では、2014 年度（前年比 96.1%増）、2015 年度（前年比 118%増）、2016 年度（前年比 86.2%増）、2017 年度（前年比 73.2%増）と在籍者数の増加率が軒並み高かった一方、2018 年度は増加率 8.7%と急激に在籍者数の伸びが停滞した。これはこの年のビザの交付が突如厳しくなったことに起因しているとみられる。期間中最も日本語学校の在籍者数が増えたのが 2017 年の 1,516 人、その他の高等教育機関では 2018 年の 1,409 人が最高である。

UNESCO の統計資料では 2012 年から 2017 年までの日本以外への留学を含むスリランカ全体での outbound 留学生の数の増加は 2,601 人名にとどまり、また留学生の増加率が

15.8%増であることを考慮すると、過去の10年弱の間にスリランカ国内において日本が留学先の有力な選択肢として存在感が増したことがわかる。

今回の調査では東京の日本語学校に通うスリランカ人留学生3名、現地日本語教育関係者2名、現地留学エージェント業関係者1名に対し聞き取り調査を行った。

スリランカ留学生のうち2名は本国で大学の日本語学科を卒業後來日、1名は General Certificate of Education Advanced Level (以下 A レベル試験) 合格後來日した。年齢はそれぞれ24歳、28歳、27歳である。

現地の日本語教育関係者は1名は大学の日本語専攻で教鞭をとる日本語教師で本稿では S4 とする。もう1名は現地の日本語教育に長年に渡り深く携わってきた元日本留学生である。本稿では S5 とする。エージェント業関係者は数年ほど前からスリランカにて留学生の斡旋業を営んでいる人物で本稿では S6 とする。

以下では、インタビュー項目別に語りについてまとめて述べる。

#### 【調査対象者(1):留学生】

##### 日本に対する印象

インタビュー対象者のいずれも日本には来日前から良い印象を持っていたという。

S1は文化や品質の高い電気製品などから良い印象を持っていると語っている。

S2とS3はテレビドラマ「おしん」の知名度が非常に高く何度も再放送をされていると語った。

S2、S3はそれぞれはおしんについて以下のように述べている

S2:「大学のときの日本人の先生が、みんなもし日本に留学するか日本で就職するとき、日本語勉強のきっかけと聞いたら、『おしん』言わないでね。今の人『おしん』知らないって。古い。だから、いい答えにしてって。みんな『おしん』ですね。・・・『おしん』は何回も、なんかテレビで出てたから。・・・一番最初は9歳ぐらい。・・・小さい頃見て、また何回も何回もテレビでやるから。」

S3:「(日本は)子どもの頃から好きだったので、高校生のときも日本語、勉強しました。でも本当は、私、10歳くらいから日本に来てほしいと思っていた。スリランカで『おしん』という日本のドラマが、見たので、これで、日本のこと、きれいな国のイメージが、子どもの頃からあります。」

なお、S2はマンガやアニメは現在に至るまであまり興味が無いと述べている。

また、「おしん」以外の日本に関する情報として、S3には既に来日をしている留学生の妹がおり、彼女から日本が安全な国であることを聞いていたという。

S3:「妹がこの前、来たので、彼女に聞いたとおり、日本は、あの、セーフティ国。誰でも、あの、本当に夜にも外に出ることできるので。国としては、他の国より日本がいいだと思います。」

3人とも初めて日本語を勉強したのは高校生の頃である。S1とS2は高卒認定のAレベルの試験科目として選択した。S2は選択した理由はAレベル試験において、教育コンサルタントをしていた父や周囲から受験で有利になるとアドバイスを受け、当初希望していたフランス語から日本語での受験に切り替えたという。

S2:「お父さんは、…フランス語を勉強して試験不合格だったらどうするって。で、フランス語駄目って。お父さんは、教師に教える人で、なんかいろんなところから情報をもらうから。フランス語より日本語簡単って言われたから、じゃあフランス語やめて日本語にしようって。」

スリランカにおいて極めて狭き門である大学入学のための戦略として日本語受験をするものが一定数いることが伺える。

### 来日動機

大卒のS1、S2はいずれも日本語専攻で、来日して日本語力を磨きたいという動機であった。S3も語学力を付け空港で働くという夢を叶えたいとしている。

3名はいずれも将来的には日本語を上達し将来に役立てたいという思いは共通している。

S3:「スリランカで、あー、タミル語とシンハラ語と英語は子どもの頃から勉強しています。だからその三つはもう大丈夫です。他のあの、世界中で誰も使っていない言葉、勉強したら、あの、空港に働くこと、入れることは易しくなるので。」

### どのように日本に留学をしたか

3名とも仲介業者を通じて日本語学校に留学をした。大学で日本語専攻だったS1とS2はスリランカのエージェンシーを通じて日本の語学学校関係者と面接の後留学を決めた。S3は日本留学中の妹からの紹介のスリランカ国内のエージェントと一体化した語学学校にて1か月日本語を勉強、N5を取得し語学学校から紹介を受けて日本語学校に留学をした。留学資金について、S1は韓国に出稼ぎに行っている姉の夫、S2は母、S3は韓国で出稼ぎをしている夫など、家族がスポンサーになっており、生活費はアルバイトから捻出をしている。アルバイトで足りない場合は仕送りをしてもらっている。

### スリランカの就職状況

S1はスリランカでは大学に行けるのはほんの一握りのエリートのみであるため、大卒であれば留学をしなくても就職先には困らないと語った。

S1:「あの、スリランカの大学を卒業したら、それは結構、いいレベルの、留学しなくてもそれ、それでも大丈夫。あの留学もプラスになる場合があるけど、日本語の場合とかだったら日本に行かないと、あの、日本語勉強した、しても、意味がないから。」

S2は、以前は英語が話せれば簡単にいい仕事が手に入ったが状況は変わり、英語に加え

もう一か国語外国語が話せることが就職の際に役立つようになったと語る。

S2：「前は英語しゃべれる人なんかは、就職も簡単にできるしいい会社に入れるし、そんなことあったのに、最近というか、なんか日本語だけじゃなく中国・韓国・フランス・ドイツ・ロシア、そんな言語を勉強して、その会社になんか簡単にに入れる。その言語を話せるんだったら。給料も高いし、就職も簡単にできる。」

日本と関連がある会社は増えているものの実感としてはあまり多くない。日系企業の工場はあまりなく、学校の教師以外では自動車やパーツの輸入業や留学のエージェント、私塾などが日本語を活かせる職業としてメジャーであるという意見が共通している

S2：「(日本関連の企業は)今はありますね。なんか企業っていうか車、車の関係。なんか車を輸入するその会社と、あとほとんどはこんなエージェントみたいな会社、留学とあとか、かん、介護?」。

S1：「そうですね、最近の日本と関係がある、あの、主に、あの、自動車とか。・・・工場じゃなくて自動車のパーツとか。それとあの、留学のエージェントとか。会社とかはね。」

#### 留学後のキャリア

S1 は日本語学校卒業後、企業ではなく塾や学校の教師や通訳等日本語を活かして働きたいとしている。S2 はインタビュー当時は大学院進学を目指していると語っていたが、インタビュー後には日本で企業に就職をしたとの連絡があった。S3 は専門学校に進学をし、観光業について勉強をし、帰国後は空港で働くことが夢だと語っている。

#### 【調査対象者(2)：日本語教育関係者】

##### 日本に対する印象

大学で日本語教育に携わる S4 は、スリランカの学生について日本や日本人が好きだという気持ちから大学で学んでいるという学生が少なからずいるなかで、全体的に日本のマンガやアニメに興味があるものは東南アジアの学生と比較して少なく、日本に対するポジティブなイメージがどのように形成されているかが良く分からないという。

大学関係者の S4 はスリランカ学生の持つ日本のイメージ以下のように語っている

S4：「よく東南アジアの国々とかだと、日本のアニメとかマンガを見て日本語が勉強したいっていうのが多いんですけど。こっちの学生、全然見てなくて。受験勉強がすごい大変みたいで、そんな暇ありませんっていうんですね。だから、そういうのを見てないのに、なんで日本が好きなのか、ちょっと私もよく分かんないんです。入って初めて授業で見ましたとか、そういう感じなんですよ。」

学生の間では、A レベル試験及び O レベル試験の受験科目で文系科目の中では比較的点数が取りやすいと認識されている。大学で学生にアンケートをとったところ「Z スコア」を

考えて日本語を選択したと語る学生が際立ったという。

大学教員の S4 は、受験制度の関係で日本語を選択する学生は多いとみている。

S4：「文系科目でいこうと思ったときに、日本語を取ると点数が取りやすいと思ってる。点数は実は A レベル試験すごい日本語難しいんですよ。他の科目より点数が取れないんだけど、でも実は、なんかその、難易度によって、なんか調整みたいなの、してるみたいなので、Zスコアが結構高く、難しい試験だから高くなると、そういうことを総合的に考えて科目を選ぶそうです。」

### スリランカの就職状況

他の東南アジア国でも日本語を教えた経験を持つ教師 S4 は、日系企業がかなり少ないという印象を持っていると語っている。また、英語が堪能な人材に需要があり、日系企業であっても日本語が話せなくてもよいというところが多く、総じて、東南アジアの某国では「日本語がすぐお金につながるがスリランカでは仕事が全然無い」という差を感じているという。

S4 は以前の勤務地と比較して次のように述べた

S4：「(日系企業は) すごい少ないです。しかも、こっちはほとんどの人が英語が話せるんで、別に日本語話せなくてもいいみたいところが、結構、日系企業の中でも多い。やっぱり東南アジアでは、すぐお金につながると思うんですね、日本語が。そこがスリランカはそうじゃないっていうのが一番、大きいと思います。だから、(東南アジアでは) 学生そんなに上手じゃなくても仕事あるじゃないですか、N3 とかでも、全然。でも、こっちは全然そういうの不存在ですから。そこが一番、大きい違いかな。」

長年スリランカの日本語教育に携わる関係者は、留学生が帰国後に日本語を活かせる環境が無く、スリランカの企業では英語が高いレベルで運用できることが非常に重視されるため、日本留学ををするとしても、英語の勉強に努める必要があるとも述べている。

また、日本留学から帰国をした留学生についても、残念ながらガイドや個人塾の経営など望むような地位につけていない現状を語った。

英語が重視される企業風土については S5 も以下のように述べる

S5：「こちらに入る会社にはですね、英語が分かればいいよ、英語が分かればすごく。でも、英語を分からない所の会社はですね、あまり大きい会社じゃないわけよ。英語が国際語ですから。」「ガイドやったり、またはその日本語の、あの一、塾をやったりね。塾っていうのは、その個人ね。そういうことをやってる。もったいないよ。でも、アメリカに行って大学卒業してきたらですね、マネジメントの仕事ができる」

### 【調査対象者③：留学エージェント】

#### エージェント業の概要

派遣は基本的に4月と10月の年に2期に行う。主にFacebook等のSNSを通じて学生のリクルートを行う他、スリランカ人のエージェントの抱える案件の代行をするというケースも多い。スリランカ人エージェントは自前での派遣先の開拓が難しいため、日本語学校の取引先が複数あるS6の仲介をするというケースが多いとのことである。派遣はリスク分散のために一校につき5名を送る。東京、大阪、埼玉、長野、長崎、熊本などの日本語学校と付き合いがある。学生はスリランカエージェンシーに日本での学費と手数料の180万から200万ルピーを収め、その中から手数料の一部がS6の会社に支払われる。面接には日本語学校関係者が直接スリランカに来るほかに、Skypeを通じて日本の別の仲介業者を相手に面接をするというケースもある。

学生が面接に合格をしたら、提出資料を作成する。ビザ交付可否について最も重要な資料が銀行残高証明書であるが、エージェントとしてその部分には関わらないようにしているという。2018年度はビザの交付率が非常に悪く、特に東京埼玉からは撤退を検討している。

#### 来日動機

スリランカ留学生のエージェント業を営むS6は今回インタビューをした3名の学生のようないくつかの学生は少数派であるとの見方をしている。エージェントの見解としては、彼らに関係する留学生のほとんどは日本での就労機会が日本留学の動機の非常に大きな部分を占めているとしている。日本のこともあまり知らずに応募をするものが大多数だという。

S6：「出稼ぎに行っている、ただ単に。(実際そのように)言う。100パーセントほぼ。

もう日本が好きでっていうのはなかなかいない。日本のこと知らないから。『おしん』しか知らないからね。」

日本留学と中東諸国への出稼ぎとが同列に語られている。また、人気が高い理由として日本には比較的審査が下りやすいと考えられているからだという見解を持っている。

S6：「今までは多分、中東じゃない？中東とかもよく行ってると思うけど、中東はかなりだまされるケースが多いらしくて。…まあ、その中でも俺が聞いた話だと、一番やっぱ留学で人気あるのは日本。日本が一番いいらしい。敷居が低い。今まではね。日本も別に、留学っていう体で考えてないと思う」

海外留学の際には学生の経済基盤がエージェントによって事前に審査されるが、英語圏の国と比較した際に、証明を要求される銀行の預金残高の額が低いことと語学基準も高いことが一因としてあるのではないかと述べている。

S6：「オーストラリアとかは、バンクバランスの残高もっと必要だから。…だから相当レベル高くて、あとアイエルツも何ポイント何とか。…多分、敷居が高いんだと思う。…相当。ほんと多分、オーストラリアとかに行きたい。」

### 【プッシュ要因とプル要因の考察】

以下にスリランカ留学生数の近年の急増に関する分析と考察について、国内的な事情（プッシュ要因）と日本に引き寄せられる要因（プル要因）に分けて述べる。

#### スリランカの国内的な要因（プッシュ要因）

スリランカ国内事情を鑑みると、①現地での中等教育の日本語学習者の増加②国内における高等教育機関の不足③2014年の中東オイル価格急落に伴う出稼ぎ先の減少という3つの状況が浮かび上がる。

第1に、スリランカ現地での中等教育の日本語学習者の増加が挙げられる。今回インタビューをした3名の留学生はいずれも高校時代に日本語の授業を受けた経験を持つ。日本語は1979年にAレベル試験の選択科目に採用され、2001年にはより低学年を対象とするOレベル試験の選択科目にもなっており、国際交流基金の日本語教育機関調査結果によると、2012年度に1,904人だった中等教育での日本語学習者数は2015年度調査では5倍弱にあたる9,480人まで増加をしている。S4が「高校でAレベル試験を受ける人が1,000人ぐらいいて、そのうち30人しかうちの大学に入れない」と語るように、スリランカの中等教育を通じて真剣に日本語学習に取り組み、下地を持つ学生は多く、現地教員並びに日本語教育関係者のたゆまぬ努力が近年の日本留学生の増加の下地となる環境を醸成をしていることは間違いがないだろう。

第2にスリランカにおける高等教育への進学は大変な難関となっている。大学進学率でみた場合、2015年ではAレベル試験で大学進学のための資格を取得したものが15,5477人（255,191人受験）なのに対し実際に大学進学を果たした学生は29,083人で大学進学資格取得者のうち19%にとどまっている(Statistical Abstract 2017)。この状況はクマーラ(2007)が問題点として指摘した当時よりは改善しているものの、依然として中等教育の高い普及率に対して高等教育の普及が追い付いていないと言えるだろう。そして、それに伴い中等教育修了者が労働市場で必要とされる技能知識やノウハウを持たないため企業への就職が困難である、或いは自営業を営むことも難しいといった若者が自立できない環境も依然として残っていることが推察できる。このような状況下でS1の語ったような「大学は行けない人が多いから、その人たちは仕事を見つける、見つからなかったら、日本に留学したいという人が多い」というようなパターンで留学を選択するケースは一定数いるとみられる。

第3に、1986年以降継続して右肩上がりだった海外への出稼ぎ労働者の派遣数が2014年の中東の石油価格の急落を機に急減したことが日本留学希望者の増加に少なからぬ影響をもたらしたのではないかと考えられる。鹿毛(2016)によればスリランカにおいて海外に出て働くことは「誰もが1度が考えたことがある人生の選択肢の一つ」であり社会に普遍的に根付いている。2014年のピーク時には300,703人であった海外出稼ぎ労働者の派遣人数は2017年には212,162人まで急減をしている。同時期の日本語学校への留学生の増加率を見ると2014年度（前年比96.1%増）、2015年度（前年比118%増）、2016年度（前年比

86.2%増) 2017 年度 (前年比 73.2%増) と爆発的に増加をしており、以前であれば中東に働きに出ていた層の一部が代替的な行先として日本留学を選択するようになったのではないだろうか。エージェントの S6 もインタビューの中で中東への出稼ぎと日本への留学を同列に語っており、人材を送り出す仲介業者側の意識としては派遣先不足の時代の新たな代替の一つとして日本留学が注目された可能性は高い。

#### 日本へ引き寄せる要因 (プル要因)

プル要因を検討する中で興味深いことは、今回インタビューをしたスリランカ留学生及び日本語教育関係者の見解では日本に来るプル要因となりうる要素のうちで、帰国後のキャリア形成と文化的な関心についてはあまりポジティブなことが述べられていない点である。

スリランカにおける日系進出企業は 2016 年の調査では 130 社である (JETRO ホームページ)。主に製造業、商社・サービス業、建設業が進出している。JETRO の報告ではミャンマー 367 社、インドネシア 1,533 社、ベトナム 1,753 社となっており、国土の広さや人口の差があるため一概に比較は出来ないものの現状でスリランカにおける日系企業は数としてはまだそれほどではない。本調査のインタビューからも、日本語を学んでも、それをスリランカ帰国後に活かすにくい環境であると留学生や関係者から認識されているということが浮かびあがる。共通して聞かれる声としては、日本語を学んだことが帰国後のキャリア形成にとってポジティブな影響を与えるかどうかについて影響は限定的ということである。事実、S1 は日本語教師か、通訳になるということを語っており、S3 についても空港という環境においては日本語を学んだことが活かせるのではないかという。逆に日本関連の企業では自動車の輸入業者やその他はほとんどがエージェントであると認識をしており、選択の幅が狭いことを示唆している。

他のアジア国で教師経験を持つ S4 は、その国では日本語がすぐお金につながるが、スリランカでは仕事が全然無いと語っており、また、スリランカには日系企業や日本語を活かした働き口がそれほど多くない認識をしている。長年スリランカの日本語教育界に携わっていた S6 はスリランカ企業で働くためには英語の運用能力が極めて重要であり、日本留学をしても英語の勉強を忘れてはならないと警鐘をならしている。

留学を一種の投資行為であるとみなした場合に帰国後にキャリアの選択肢が限られているように見える日本留学をしたいと考える若者が増えている状況はやや違和感があるのも事実である。

また、日本文化に対する関心については、大学で日本語教育に携わる日本語教育関係 S4 のコメントでも、大学の日本語専攻の学生でもそれほど日本文化にあまり関心を持たずに入学をするケースが多く、テレビドラマのおしんがいまだに日本のイメージを想起させるものとして語られる等日本に対する関心がそれほど高くないとされており。3 名の留学生についても、いずれも日本や日本のイメージとしてはおしんや電化製品などを挙げている。

いずれも決して悪い印象ではないが、日本への留学の積極的な理由となりうるかは疑問がある。

逆に、日本へ引き寄せる要因としてポジティブなものとしては、S6 の語るような英語圏の国と比較し留学に対する敷居が金銭面や語学要件において低い点があげられる。留学先として第一希望でなくとも、国外へ出たいと考えるものにとって選択肢となっている可能性が高い。また、日本での就労機会が日本留学の重要な動機となっているという S6 の証言が正しいとすれば 2010 年の入管法改正で留学ビザと就学ビザが統合されたことによって日本語学校の留学生が週 28 時間のアルバイトが可能になったことも追い風になっているはずである。今回の 3 名の留学生はいずれも日本での生活費についてはアルバイトで賄っており、S3 は週 28 時間いっぱいアルバイトをしているにも関わらずそれでも足りない場合は実家や夫からの仕送りをしてもらうという。どのような目的での留学にせよ、多くのスリランカ留学生にとってアルバイトなくしては日本での生活は成り立たない状況だと言える。

また、インタビューに協力をしてくれた 3 名の留学生はいずれも、留学を検討する際に日本に在住する親戚や友人等に生活費などについて相談をしている。このような日本留学生が増加すればするほどスリランカ国内にいるものにとっては検討の材料となる信頼性の高い情報が手に入れやすくなることから、より日本留学のハードルは下がると言える。

#### 4. まとめと考察

本調査では、日本への留学生が急増している東南アジア諸国のうち、ベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカ 4 国からの日本への留学生および留学経験者、日本留学および就職斡旋会社、日本語教育関係者、日本留学経験者を雇用している日系企業関係者などへのインタビュー調査を実施した。この結果、いずれの国においても共通するプッシュ要因・プル要因が見いだされた。

4 か国に共通する主なプッシュ要因としては、主に以下の点が挙げられる。

- ①日本との国同士の関係が良好で、日本への好感度が高いこと
- ②古くから、テレビドラマやアニメなど日本語・日本文化が浸透していること
- ③家族や親族、友人など、身近な人たちが日本に滞在している（した）こと
- ④大学進学率が上がる一方、大卒の資格や専門に見合った就職先が少ないこと
- ⑤大学の教育レベルが必ずしも高くないこと
- ⑥日本への留学や就職を斡旋するシステムが（質の良し悪しに関わらず）確立していること

一方、日本側のプル要因としては、

- ①同じアジア圏内の国として、距離的・経済的に留学に対する敷居が低いこと
- ②きれいで住みやすく、安全であること
- ③日本人が優しく、穏やかで、親切であること

- ④留学中のアルバイトが可能であること
- ⑤欧米諸国に比べて大学の学費が安く、奨学金も得やすいこと
- ⑥大学教育のレベルが高いこと
- ⑦出身国への日系企業の進出が盛んで、日本語を使えば収入の高い仕事得やすく、帰国後の就職や日本での就職が有利になること

上記のプル要因のうち、③については、こうした面とは逆に、「日本人は本音とたてまえがあり、冷たく、仲良くなりにくい」という面も指摘されていることには留意すべきであろう。⑤の奨学金については、国費留学生の他、JASSO による日本留学生への奨学金も挙げられる。また、日本のグローバル化施策による大学の留学生受け入れ態勢の整備が進んできたことも、要因として考えられよう。

このほか、国別にみられた特徴的なプッシュ要因としては、以下のようなものが挙げられる。

ベトナムにおいては、古くから外国に住むことのハードルが低く、家族内でも比較的気軽に日本へ留学する雰囲気がある。また、JASSO ベトナム事務所の開設などにより、よりいっそう日本留学の情報が得やすくなっている。

ミャンマーでは、軍政が解かれて民主制へ移行し、日本企業の進出が著しい。また今回のインタビューへの協力者には、日本の大学の海外事務所からの紹介の方々も含まれており、日本留学の促進はさらに進むものと考えられる。

インドネシアにおいて特有のプッシュ要因としては、多文化国家特有の就職機会の不均等がある。他の民族と比較して国内でよい仕事を得にくい中華系民族は、国内での競争をさけるために海外留学を選択することが多い。

スリランカでは、他の 3 国と異なり、帰国後のキャリア形成についてはポジティブな影響が少なく、日本語を学んでも、それをスリランカ帰国後に活かすにくい環境であるということが明らかになった。スリランカには日系企業がそれほど進出しておらず、日本語を活かした働き口は多くない。今回、出稼ぎが盛んなスリランカにおいては、石油価格下落により落ち込んだ中東に代わる出稼ぎ先の一つとして日本が浮上した可能性が指摘された。

さらに、特に技能実習生をはじめ日本における就労者数が急増しているベトナムにおいては、外国人労働者への差別や、期待したほどの給料ももらえず悪条件下での労働、悪質な仲介業者による被害などについての言及も多くみられ、今後の日本社会への大きな課題が改めて提示される形となった。早急な解決は困難な面もあろうが、今回の調査の成果をふまえ、対象国が遂げつつある急激な社会的・政治的・経済的变化に日本がいかに対応するのが、今後のグローバル化の大きなキーとなることは間違いないであろう。

【参考文献】

- CENTRAL BANK OF SRI LANKA DATA LIBRARY. (2018, April 6) Foreign Employment- Total Placements.  
[https://www.cbsl.lk/eResearch/Modules/RD/SearchPages/Search\\_Result.aspx?R=VdmbxiPFRJA=](https://www.cbsl.lk/eResearch/Modules/RD/SearchPages/Search_Result.aspx?R=VdmbxiPFRJA=) (2019年2月20日閲覧)
- Das, S. (2015) Determinants of tertiary level students' overseas study decision. NEW TRENDS IN ECONOMICS, MANAGEMENT AND FINANCE, 22.
- Department of census and statistics – Sri. (n.d.). Statistics Abstract 2017 CHAPTER XIV - EDUCATION.  
<http://www.statistics.gov.lk/Abstract2017/index.asp?page=chap14> (2019年2月20日閲覧)
- 外務省 (2017) 「ミャンマー連邦共和国基礎データ」  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/myanmar/data.html> (2019年2月22日閲覧)
- 外務省 (2019) 「インドネシア共和国基礎データ」  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html> (2019年2月22日閲覧)
- 外務省 (2019) 「ベトナム共和国基礎データ」  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/index.html> (2019年2月10日閲覧)
- JETRO (2012) 「教育事情—インドネシア BOP 層実態調査レポート」  
[https://www.jetro.go.jp/ext\\_images/theme/bop/precedents/pdf/lifestyle\\_education\\_idn.pdf#search=%27%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%8D%E3%82%B7%E3%82%A2+%E6%95%99%E8%82%B2%E4%BA%8B%E6%83%85%27](https://www.jetro.go.jp/ext_images/theme/bop/precedents/pdf/lifestyle_education_idn.pdf#search=%27%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%8D%E3%82%B7%E3%82%A2+%E6%95%99%E8%82%B2%E4%BA%8B%E6%83%85%27) (2019年2月22日閲覧)
- JETRO (2016) 「教育事情—ミャンマー BOP 層実態調査レポート」  
[https://www.jetro.go.jp/ext\\_images/theme/bop/precedents/pdf/lifestyle\\_education\\_201601\\_mm.pdf#search=%27%E3%83%9F%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%9E%E3%83%BC+%E9%AB%98%E7%AD%89%E6%95%99%E8%82%B2%E6%A9%9F%E9%96%A2%E3%81%AE%E5%B0%B1%E5%AD%A6%E7%8E%87%27](https://www.jetro.go.jp/ext_images/theme/bop/precedents/pdf/lifestyle_education_201601_mm.pdf#search=%27%E3%83%9F%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%9E%E3%83%BC+%E9%AB%98%E7%AD%89%E6%95%99%E8%82%B2%E6%A9%9F%E9%96%A2%E3%81%AE%E5%B0%B1%E5%AD%A6%E7%8E%87%27) (2019年2月22日閲覧)
- JETRO (2019) ベトナム基本情報 [https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic\\_01.html](https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic_01.html)  
(2019年2月10日閲覧)
- 上別府隆男 (2018) 「ミャンマーの高等教育改革と今後の方向性」『リクルートカレッジマネジメント 210』 58-61.
- クマーラ,アーナンダ (2007) 「スリランカの教育制度の歴史と現状及びその問題点について」『鈴鹿国際大学紀要 Campana= Suzuka International University journal campana』 13, 1-19.
- 国際交流基金 (2015) 「2015年度海外日本語教育機関調査」

[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey\\_2015/spreadsheet.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/spreadsheet.pdf)  
(2019年2月22日閲覧)

Mazzarol, T., & Soutar, G. N. (2002) "Push-pull" factors influencing international student destination choice. *International Journal of Educational Management*, 16(2), 82-90.

日本学生支援機構 (2019) 「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2018/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html) (2019年2月22日閲覧)

李敏(2015)「中国人留学生の日本留学決定要因に関する研究: Push-and-Pull モデルに基づいて」『(新堀通也教授追悼特集) 大学論集』48, 97-112.

佐藤由利子(2012)「ネパール人日本留学生の特徴と増加要因の分析—送出し圧力が高い国に対する留学生政策についての示唆—」『留学生教育』17, 19-28.

鹿毛理恵(2016)「スリランカの海外出稼ぎと経済社会--政策と実績 (特集 内戦後のスリランカ経済--持続的発展のための諸条件)」『アジア研ワールド・トレンド』, 22(1), 30-34.

清水英明 (2012)「アジアの高等教育と留学事情—第一回インドネシア」『Between』 4-5号, 36-37.

Wadhwa, R. (2016). Students on move: Understanding decision-making process and destination choice of Indian students. *Higher Education for the Future*, 3(1), 54-75.